

2022 年 2 月

食料安全保障月報

(第 8 号)



令和 4 年 2 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 2 月食料安全保障月報（第 8 号）

目 次

概要編

I	2022 年 2 月の主な動き	1
II	2022 年 2 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 ロシアの中国向け小麦輸出拡大なるか	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	9
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	11
5	FAO 食料価格指数の推移	15
6	食品小売価格の動向	16

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 2021/22 年度の輸出量は過去 6 年で最低	
	＜カナダ＞ 2021/22 年度末在庫は減産により過去最低の見通し	
	＜豪州＞ 2021/22 年度の生産量、輸出量は史上最高の見通し	
	＜EU27+英国＞ 2022/23 年度の冬小麦はおおむね良好に越冬	
	＜中国＞ 2021/22 年度の輸入量は前年度に比べ 23.3%減少する見込み	
	＜ロシア＞ ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠 800 万トンを設定	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量史上第 2 位、エタノール用需要増、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 高温・乾燥も、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し	
3	コメ	14
	＜米国＞ 2021/22 年度の期末在庫が対前年度比で 23%以上減少の見通し	
	＜インド＞ 2021/22 年度の輸出量が上方修正	
	＜中国＞ 2021 年のコメ輸入量が史上最高	
	＜タイ＞ 2020/21 年度の輸出量が上方修正	
	＜ベトナム＞ 2021 年の輸出量は約 627 万トンの見通し	

Ⅱ	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
	＜米国＞	生産量は史上最高も、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	南部の高温・乾燥で単収下方修正、生産量は減産見通し
	＜アルゼンチン＞	高温・乾燥で単収下方修正、輸出税は継続
	＜中国＞	減産見通し、消費量・輸入量は経済成長の減速で下方修正
	＜カナダ＞	西部での高温乾燥の影響で減産見通し

特別編①「FAO 食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）」

特別編②「種苗をめぐる情勢について」

【利用上の注意】

表紙写真：

ブラジル南部のパラナ州の収穫を待つ大豆(2月6日撮影)

(概要編)

I 2022 年 2 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、これから作付け・収穫が行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、2 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、生産量は史上最高となるものの、米国やカナダの減産により世界の期末在庫率は前年度を下回っていることに加え、ロシアの穀物輸出割当の設定等から、国際相場は高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、米国で大豆が史上最高の生産量となるも、南米の乾燥の影響で、生産量が先月に引き続き下方修正されたため、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：1 月）については、主に植物油（179→186）及び乳製品（129→132）が上昇した影響により、12 月から再び上昇に転じた（134→136）。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降は下落傾向で推移。

ウクライナ情勢が緊迫化する中で、現時点では、我が国への食料供給への直接的な影響は確認されていない。一方、原油価格や穀物価格は上昇する動きを見せており、今後の国際貿易や国際相場の動向に注意が必要。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ブラジル産大豆の生産見通しは南部の乾燥の影響で下方修正

前年 11 月から継続したブラジル南部の乾燥により、ブラジル食料供給公社（CONAB）2 月の穀物レポートでは、収穫期を迎えている 2021/22 年度の大豆の生産見通しを前月から 1,500 万トン下方修正し、1 億 2,550 万トン（対前年度比 9%減）の見通し。同様に、南部で栽培され、収穫期を迎える夏とうもろこしについては、前月から 40 万トン下方修正し、2,440 万トンとし、今後大豆の収穫後のほ場に作付けされる冬とうもろこしとの合計で 1 億 1,230 万トン（対前年度比 29%増）の見通しである。

米国農務省（USDA）の分析によれば、1 月末にはブラジル南部で降雨があったものの、大豆や夏とうもろこしへの乾燥の影響を回復するには遅かったとみている。

なお、アルゼンチンでも、高温乾燥の影響を受け、ブエノスアイレス穀物取引所が生産見通しを 4,400 万トンから 4,200 万トンに下方修正した。パラグアイ農牧省は、2021/22 年度大豆に関し、前年度の 1,000 万トンから高温乾燥により半減する見通しを公表した。

2 ロシア、ウクライナの穀物輸出動向

穀物に輸出税を課しているロシアは、さらに 2 月 15 日から 6 月 30 日まで、小麦に 800 万トンの輸出枠、大麦、ライ麦、とうもろこし計で 300 万トンの輸出枠を設定した。それに先んじて 2 月 8 日には、206 業者に割当数量を公表した。一方、ウクライナは小麦、とうもろこしとも史上最高の豊作の見通しである。

両国の世界の穀物貿易に占めるシェアは、USDA によれば、小麦 29%、とうもろこし 19%、大麦 31%と大きな地位を占めている。主要輸出先は中近東などが中心で、我が国は両国から上記の穀物はほとんど輸入していない。今年に入り両国間では政治的緊張が続いていたが、2 月 24 日にロシアはウクライナへの侵攻を開始した。今後、国際穀物貿易や価格に与える影響について注視していく。

3 2022/23 年度の小麦の作付け、生育状況

国際穀物理事会 1 月レポート等の情報によれば、北半球は冬小麦が越冬による休眠期を迎えている。2022/23 年度の世界の小麦全体の収穫面積については、肥料価格の高騰により、過去 5 年平均は上回るも、前年度よりわずかに減少の 2 億 2,660 万ヘクタール。生産量は単収の改善から前年度比 1%増の 7 億 9,200 万トンの見通しである。

欧州の EU 地域は、フランスで菜種への転換等により収穫面積は減少しているが、おおむね良好に休眠期を迎えているとみられる。なお、イタリアやスペインでの乾燥による影響が懸念されている。

ロシアでは、収穫面積は前年度並みで、前年末の降雨により土壌水分は良好で、冬枯れ被害が減少する見通しで、おおむね良好に休眠期を経過しているとみられる。

中国は、作付け期の秋の降雨過多により作付けが遅れたが、12 月に入り、冬小麦産地は日照条件、土壌の水分含有量に恵まれ、おおむね良好に休眠期を迎えている。

米国は、冬小麦の作付面積は 2 年連続で増加しているが、グレートプレーンズ南部では乾燥による作柄への影響が懸念されている。

冬小麦については、休眠明けの春の天候が単収に大きな影響を与えるといわれていることから引き続き注視が必要である。

Ⅱ 2022 年 2 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1 月末、280 ドル/トン台前半で推移。2 月に入り、米国冬小麦産地での降雨はあったものの、ウクライナ情勢の緊張を受けて上昇し、2 月中旬には 290 ドル前半まで上昇した。その後、ウクライナ情勢の一時緩和で下落も、米国冬小麦産地の乾燥に加え、ウクライナ情勢の緊張を受けて上昇し、2 月下旬現在、340 ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、1 月末、240 ドル/トン半ばで推移。2 月に入り、南米の短期的な降雨予報等で一時値を下げる場面はあったものの、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念や原油価格の上昇、ウクライナ情勢の緊張等から上昇し、2 月下旬現在、270 ドル/トン前後で推移。

コメは、1 月末、450 ドル/トン台前半で推移。2 月に入り、旧正月により貿易活動が活発でなくなったことから、2 月中旬には 440 ドル/トン台半ばまで値を下げた。その後、パーツ安を背景に海外需要の低迷が重しとなり更に値を下げ、2 月下旬現在、430 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1 月末、540 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念や USDA の 2 月需給報告や南米の現地機関の見通しが大豆生産の大幅な減少となったことに加え、ウクライナ情勢の緊張等から値を上げ、2 月下旬現在、610 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 440 万トン下方修正され 27.8 億トン。消費量は、前月から 160 万トン下方修正され 27.9 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.4% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され 27.8 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され 27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、5.1 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は前月からわずかに下方修正された。

(注：数値は 2 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.1 億トン。消費量は前年度を上回り 6.2 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、16.9% となる見込み。

(注：数値は 2 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：ロシアの中国向け小麦輸出拡大なるか

2月4日、北京冬季五輪開会式に伴い、プーチン大統領が訪中し、習近平国家主席と会談し、中露間で、今まで植物防疫の関係上、地域限定されていたロシア産小麦・大麦の輸入に関し制限撤廃に合意した。しかし、ロシア産小麦については90ドル/トンを超える輸出税に加え、2月15日から6月30日までの間800万トンの輸出枠が設定されている。両国の貿易動向を中心にまとめた。

1 中露間の穀物貿易にかかる合意の内容

中国外交部などの公表資料によると、2月4日に、ロシアと中国は、スポーツ協力や天然ガスの貿易等に加え、農産物の貿易(小麦、大麦、アルファルファ)を含む15の文書に調印した。ロシア動植物検疫監督庁によると、ロシア産小麦、大麦の輸入については、植物検疫の関係上、今までロシア東部のシベリア連邦管区のアルタイ地方など7地域に限定されていたが、これを撤廃しロシア全土を対象とすることで合意した。アルファルファについてもロシア産の輸入が解禁された。

ロシア国内の報道によると、従来ロシアから中国への小麦等の輸出はアルタイ地方など7つの地域に限って認められており、対中国輸出量は少なかった。今般ロシア全土からの輸出が可能になったことにより、小麦の対中国輸出が活発化すれば、年間100万トンを超える輸出も可能とのロシアの穀物輸出業界の声も報じられている。

表 中国の米国とロシアからの小麦、とうもろこし、大豆輸入

	輸入先	2021年				(参考2020年)
		輸入量	シェア	順位	対前年比	輸入量
小麦	豪州	273	28	1	151	109
	米国	273	28	2	53	178
	カナダ	254	26	3	11	230
	ロシア	5	1	7	▲ 32	7
	計	972	100		19	815
とうもろこし	米国	1,983	70	1	357	434
	ウクライナ	824	29	2	31	630
	ブルガリア	14	1	3	▲ 45	26
	ロシア	9	0	4	▲ 35	14
	計	2,836	100		151	1,130
大豆	ブラジル	5,815	60	1	▲ 10	6,428
	米国	3,231	33	2	25	2,589
	アルゼンチン	375	4	3	▲ 50	746
	ロシア	54	1	6	▲ 22	69
	計	9,653	100		▲ 4	10,033

注：計にはその他の国を含む。出典：中国海関統計を農林水産省で加工

2 中国の穀物輸入の現状

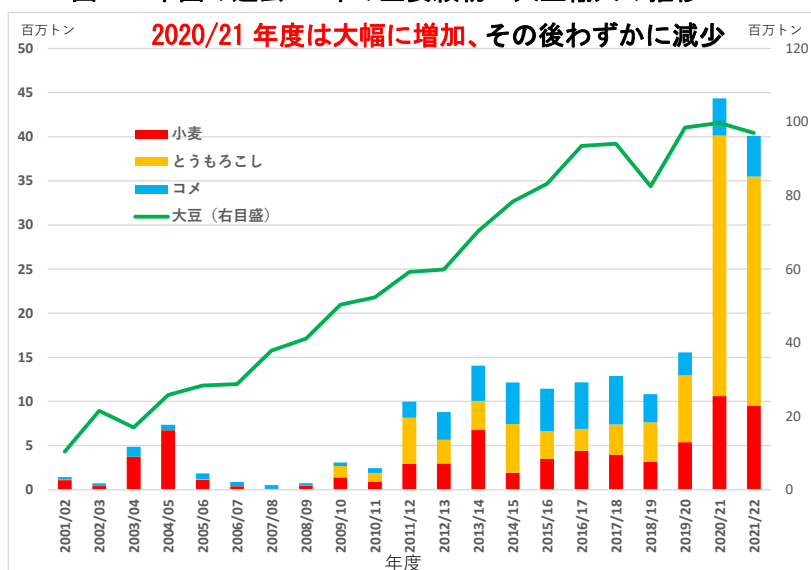
中国の穀物輸入は、大豆については、近年大幅に増加してきた。

2020年には、アフリカ豚熱

(ASF) からの豚肉生産の回復により、飼料向け需要が増加し、輸入量は史上最高の1億トンを超えた。さらにASFの感染拡大を機に、養豚経営の大規模化が進み、レストランからの食品残渣に依存していた小規模経営から、とうもろこしや大豆を原料とした配合飼料を給与する大規模経営に移行してきたことから、とうもろこしの飼料向け需要が大幅に伸びた。この結果、とうもろこし

価格が小麦の価格を上回り、代替として小麦の飼料向け需要も増加した。大豆と同様に、ASFの影響からの回復による豚の飼養頭数の増加により、2020年の小麦、とうもろこしの輸入も大

図1 中国の過去20年の主要穀物・大豆輸入の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.2.9)を農林水産省で加工

幅に増加した、

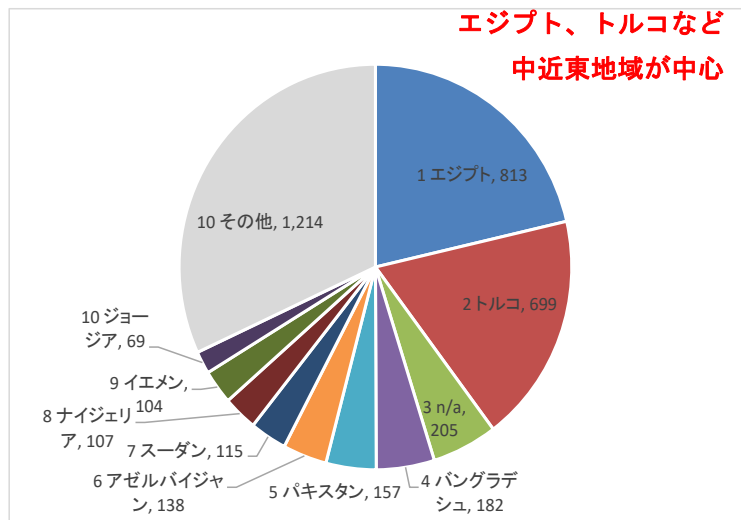
2021 年は、小麦の輸入量は引き続き増加し 972 万トン（対前年比 19%増）で、史上最高の豊作となった豪州産が 1 位で 273 万トン（対前年比 2.5 倍）、僅差で米国産 273 万トン（同 53% 増）、カナダ産 254 万トン（11%増）と上位 3 か国で 8 割以上を占めている。

また、とうもろこしの輸入量は 2,836 万トン（対前年比 2.5 倍）と史上最高となった。主に米国とウクライナから輸入しているが、米国からの輸入量が 1,983 万トン（同 4.6 倍）と大幅に増加し、ウクライナからの輸入量 824 万トン（同 31%増）を上回り、順位が逆転した。

一方、大豆については、搾油マージンの悪化などによる搾油需要の低下などもあり、輸入量が 1 億トンを下回る 9,653 万トン（対前年比 4 %減）となった。ブラジル産が 5,815 万トン（対前年比 10%減）と 1 番多いものの、前年よりシェアが低下し、米国産が 3,231 万トン（同 25%増）と増加した。

2021 年で見ると、小麦、とうもろこし、大豆とも、米中通商協議一次合意の影響もあり、米国産穀物の輸入が増加し、とうもろこしは 1 位、小麦、大豆も 2 位と主要輸入先となっている。一方、ロシア産については、小麦 5 万トン（前年比 32%減）、とうもろこし 9 万トン（同 35%減）、大豆は 54 万トン（同 22%減）と、輸入量は米国産より 2 桁以上少なく、いずれも前年より減少している。3 品目とも 2021 年 2 月以降継続的に輸出税が賦課されていることが要因とみられる。

図2 ロシアの 2020/21 年度の小麦輸出 3800 万トンの内訳



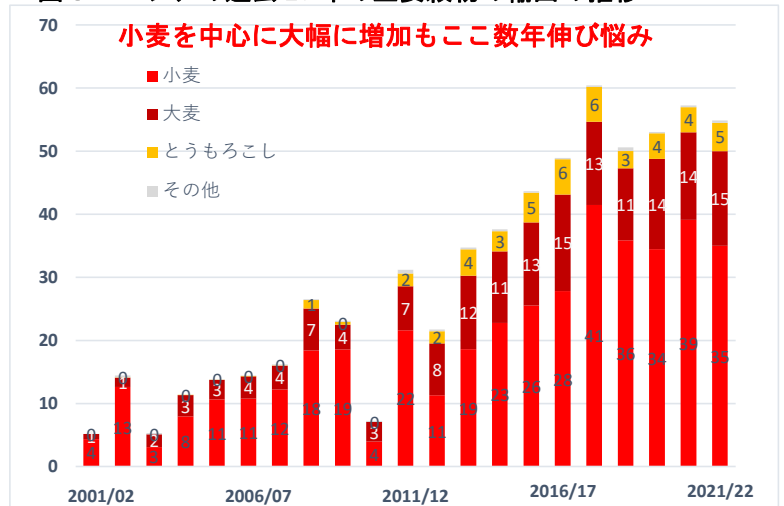
出典 ロシア税関資料を農林水産省で加工 n/a は仕向け先不明

3 ロシアの穀物輸出の現状

ロシアの穀物生産は年々増加し、ここ 20 年間で大きく拡大してきた。米国農務省（USDA）によれば、2021/22 年度の小麦については、生産量は冬枯れの影響を受け 7,550 万トン（クリミアを除く以下同じ）と前年度より減少し、輸出量も 3,500 万トンと減少しつつも、EU に次いで世界第 2 位の輸出国となっている。2021/22 年度のとうもろこしの生産量は、史上最高レベルの 1,500 万トンとなり、輸出量も 450 万トンに増加している。

小麦の輸出先は主に地理的に近いエジプトやトルコといった中近東地区が中心であるが、2021/22 年度はイラン向けが増加している。さらに、2018/19 年度、2019/20 年度の豪州の干ば

図3 ロシアの過去 20 年の主要穀物の輸出の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2022. 2. 9）を農林水産省で加工

つに乗じて東南アジア諸国にも輸出先を広げた。

ロシア産小麦の対中国向け輸出が伸びなかった背景には、輸出税や輸出割当の影響に加え地域限定が大きかったとみられる。さらに、輸入が認められていたシベリアのアルタイ地方などから中国の需要の大きい沿岸部までコストがかかる遠距離の鉄道輸送となること、さらに鉄道の軌道幅が両国で異なるため、国境で貨車の積替えが必要となり更にコストがかかることなども挙げられる。

油糧種子については、もともとロシアはひまわり種の生産・輸出が盛んで、USDAによれば、2021/22年度は1,550万トンと史上最高が見込まれている。大豆については、もともと生産量はひまわり種と比べ少なく、輸入国であるが、同じく、2021/22年度の生産量は史上最高の480万トンとなる見通しである。これまでは、中国向け輸出を目的に栽培していた極東連邦管区のアムール州等が主産地であったが、最近では、畜産向け需要の多い中央連邦管区の生産が上回っている。アムール州から中国向けの輸送コストは安い。しかし、2021年2月から輸出税（当初30%。後に20%に引き下げ）の導入により対中国輸出が影響を受けたとみられる。

4 世界の穀物貿易への影響

今回のロシアと中国の合意により、ロシアの穀物主産地の西部からの中国向け小麦輸出が可能となった。従来の鉄道輸送ではなく、黒海からバルク船で中国の沿岸地域まで輸出できると期待されている。しかしながら、ロシア産小麦には現在90ドル/トンを超える輸出税が課せられており、他地域向けも含め輸出が低調なこと、2022年2月15日から6月30日まで小麦に800万トンの輸出枠が設定され、2月8日には業者に枠がすでに配分されたことから、新規需要として中国向け小麦輸出がすぐに増加するとは考えにくい。

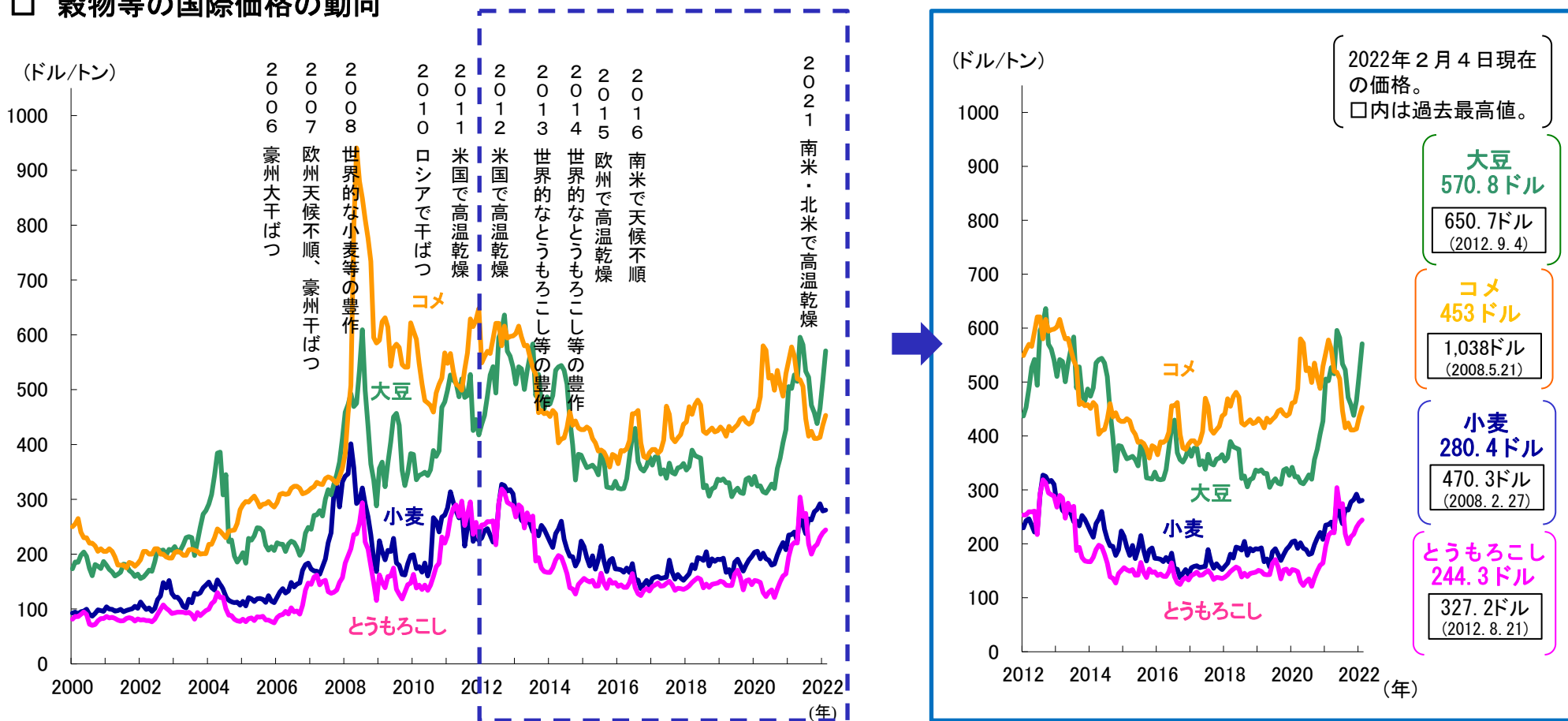
なお、中国は、2012/13年度以降、ウクライナ産のとうもろこしの輸入を開始し、2021年には800万トン以上輸入しており、ロシアからの小麦やとうもろこしの輸入量を大きく上回っている。2月24日にはロシアがウクライナに侵攻した。我が国はロシアやウクライナからの穀物輸入はほとんどないが、中国は同日の外交部の会見で両国から農産物を輸入するとしている。両国とも中近東地域を中心に、東南アジア等へも穀物の輸出市場を広げていることから、中国を含む輸入国への影響も含め世界の穀物需給への注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



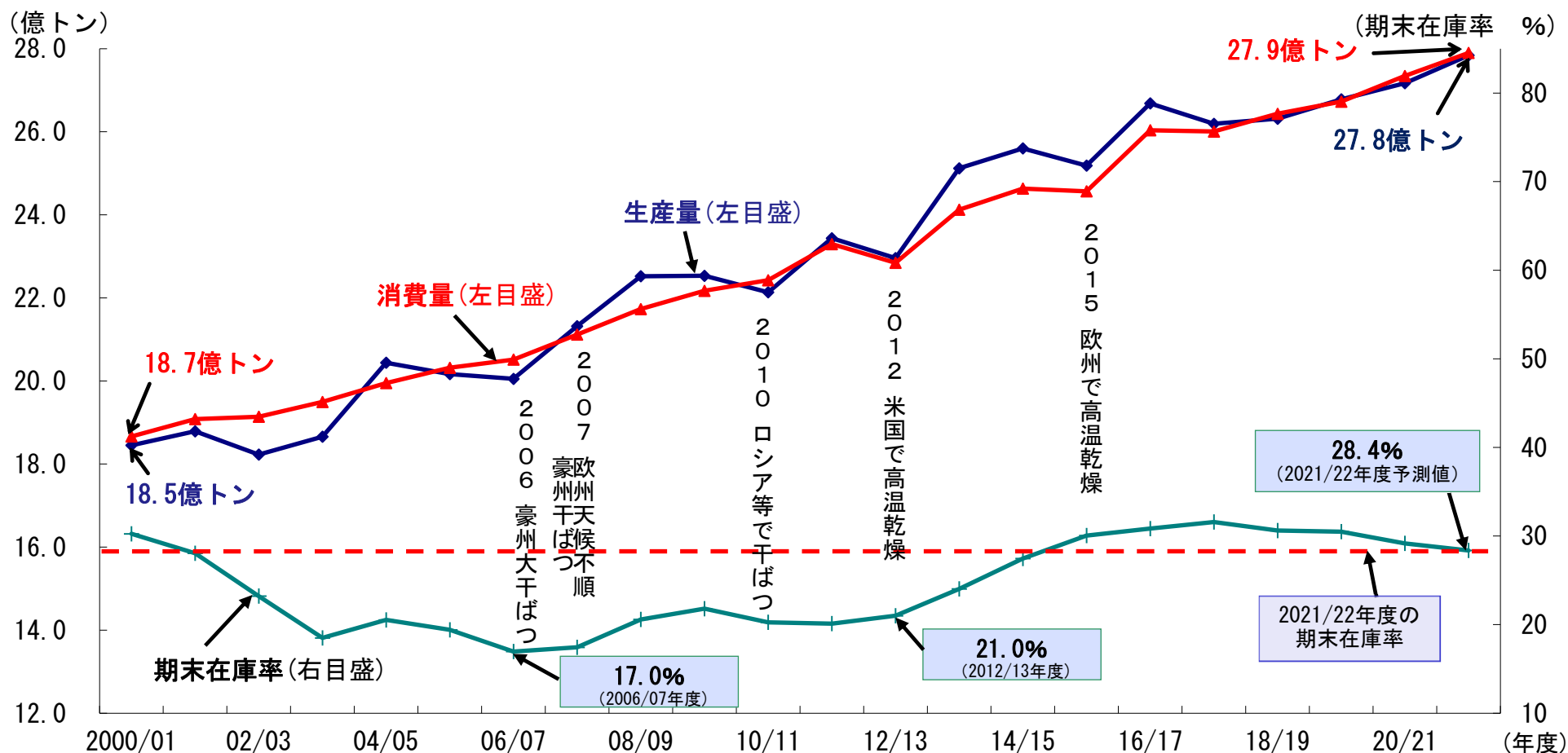
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。玉米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。ただし、2022年2月4日現在の玉米価格は1月26日の価格である。（2月2日の価格は未公表）

注2：過去最高価格については、玉米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、玉米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

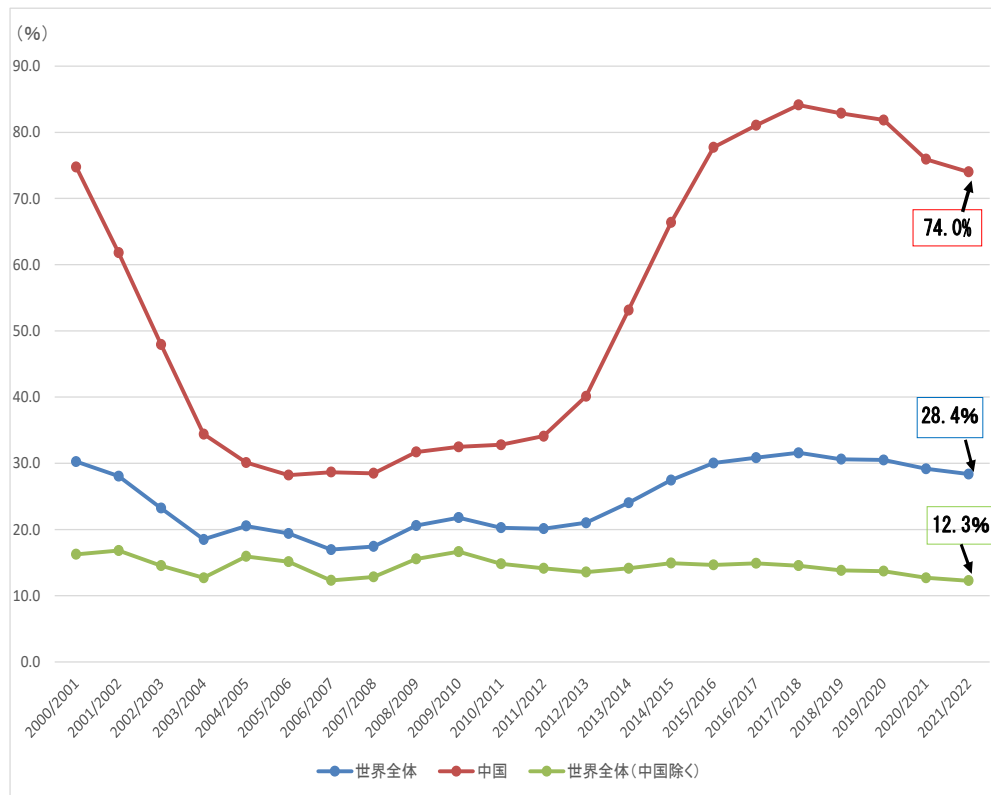


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2022)、「PS&D」

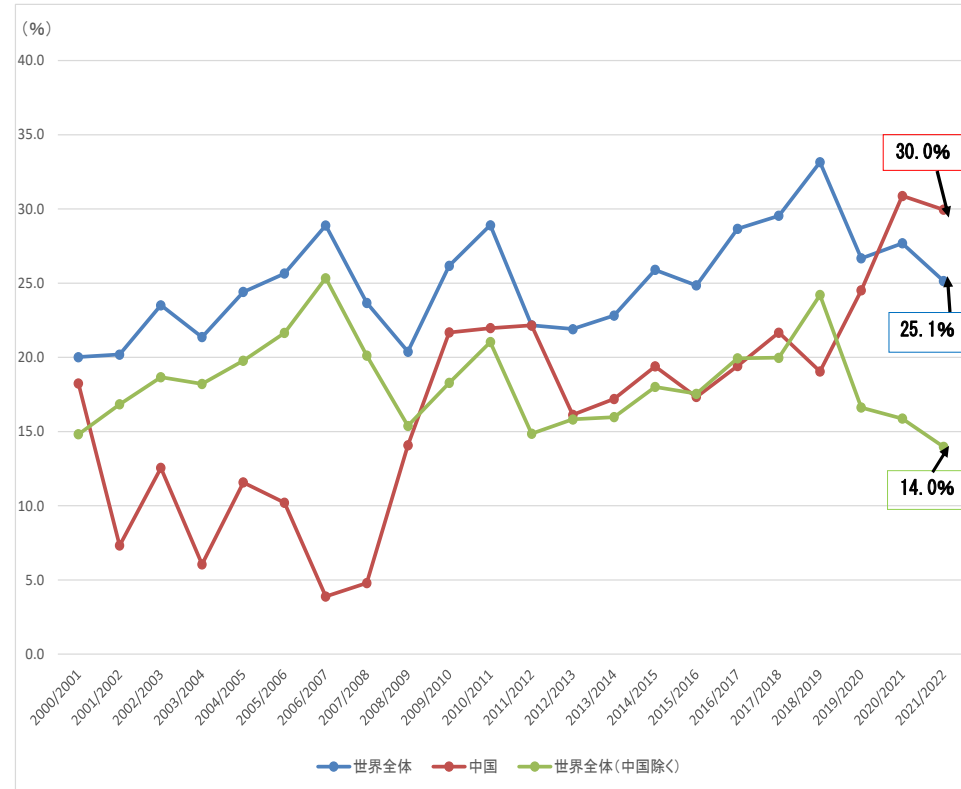
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(February 9, 2022)

注：1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

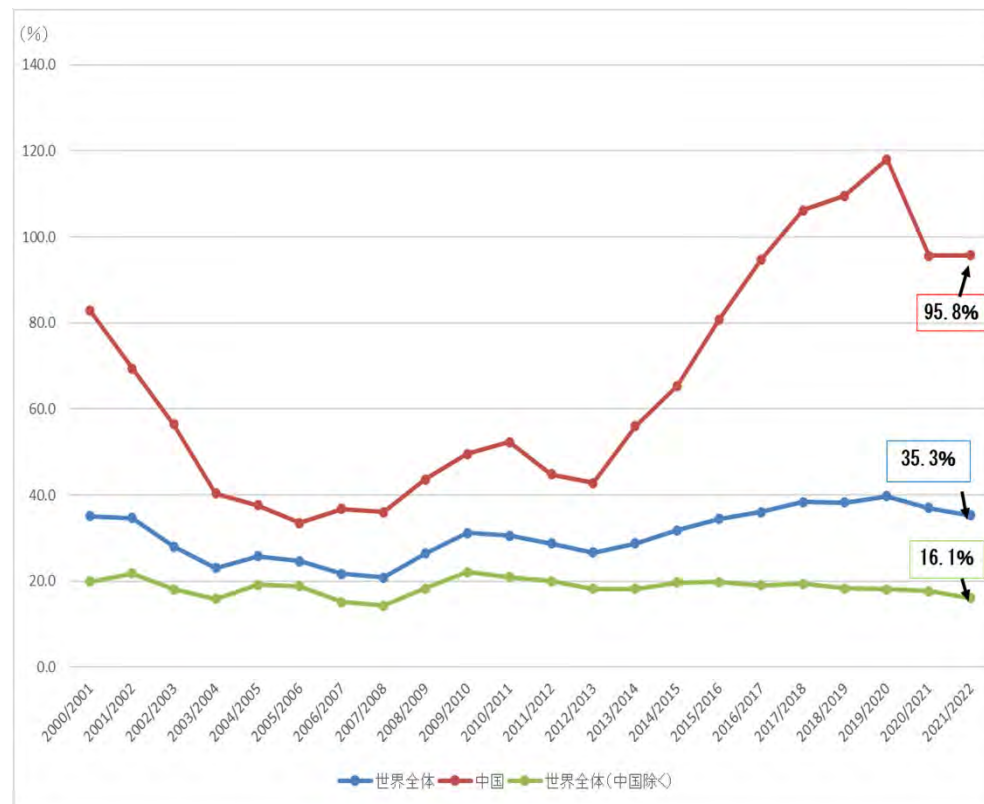
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

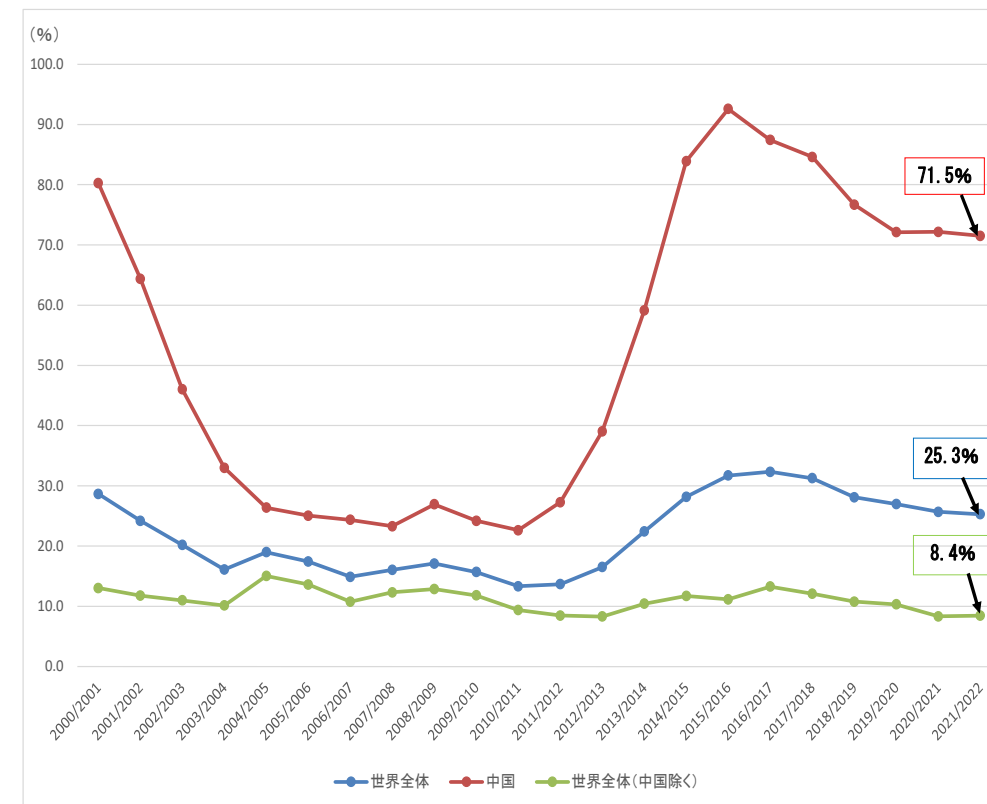
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 9, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

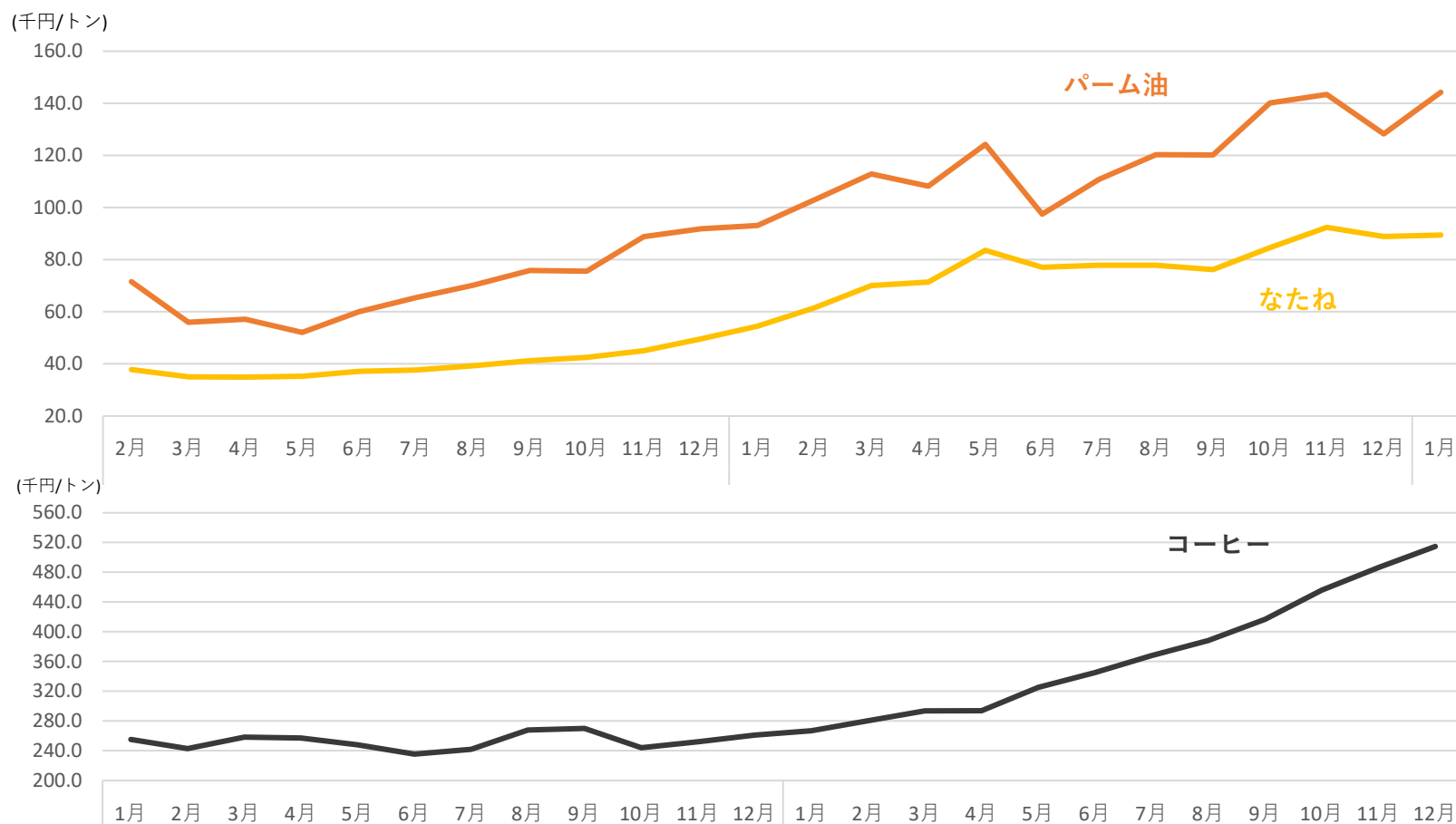
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年2月16日現在
□内は2020年2月以降の最高値。

パーム油
144.2千円/トン
144.2千円/トン
(2022.1)

なたね
89.4千円/トン
92.4千円/トン
(2021.11)

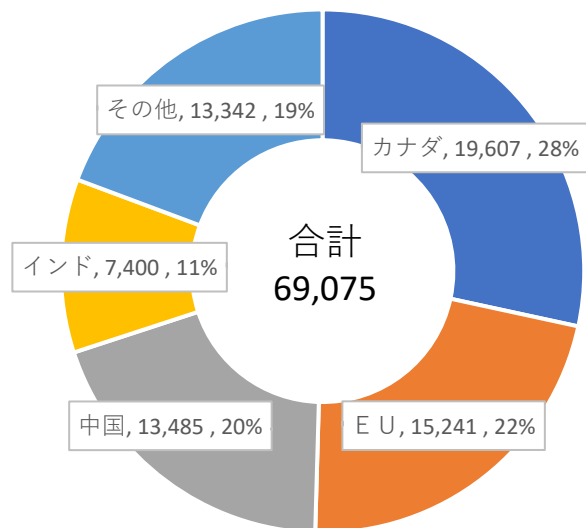
コーヒー
514.7千円/トン
514.7千円/トン
(2021.12)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

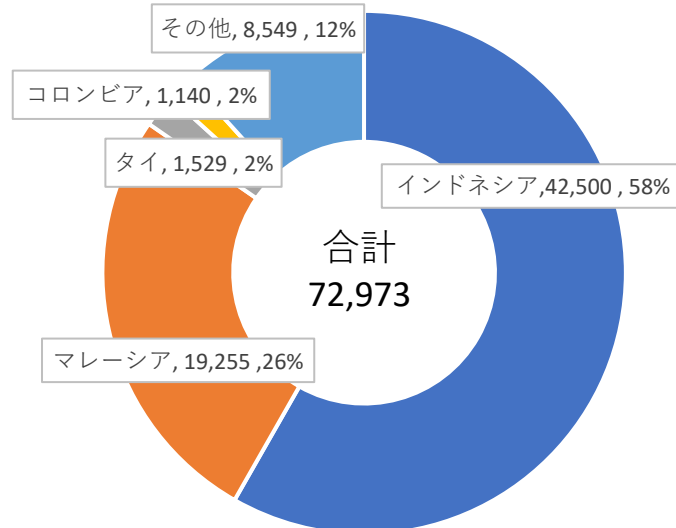
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



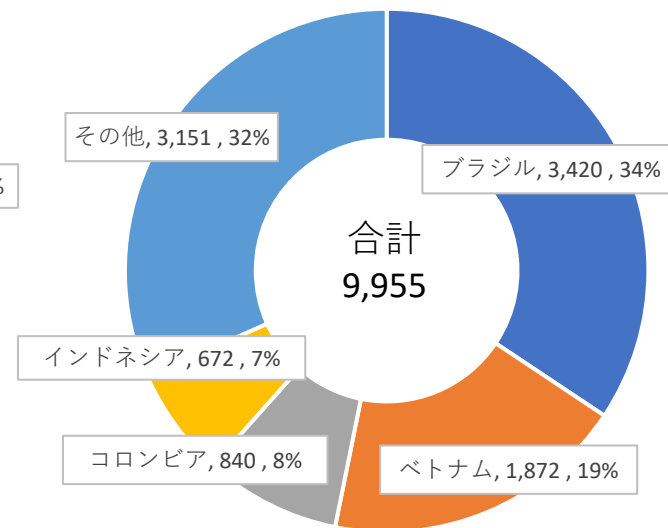
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年											2021年												2022年
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
なたね	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4
前月比	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6
前年同月比	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2021年												2021年												2022年
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
パーム油	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	
前月比	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	
前年同月比	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3

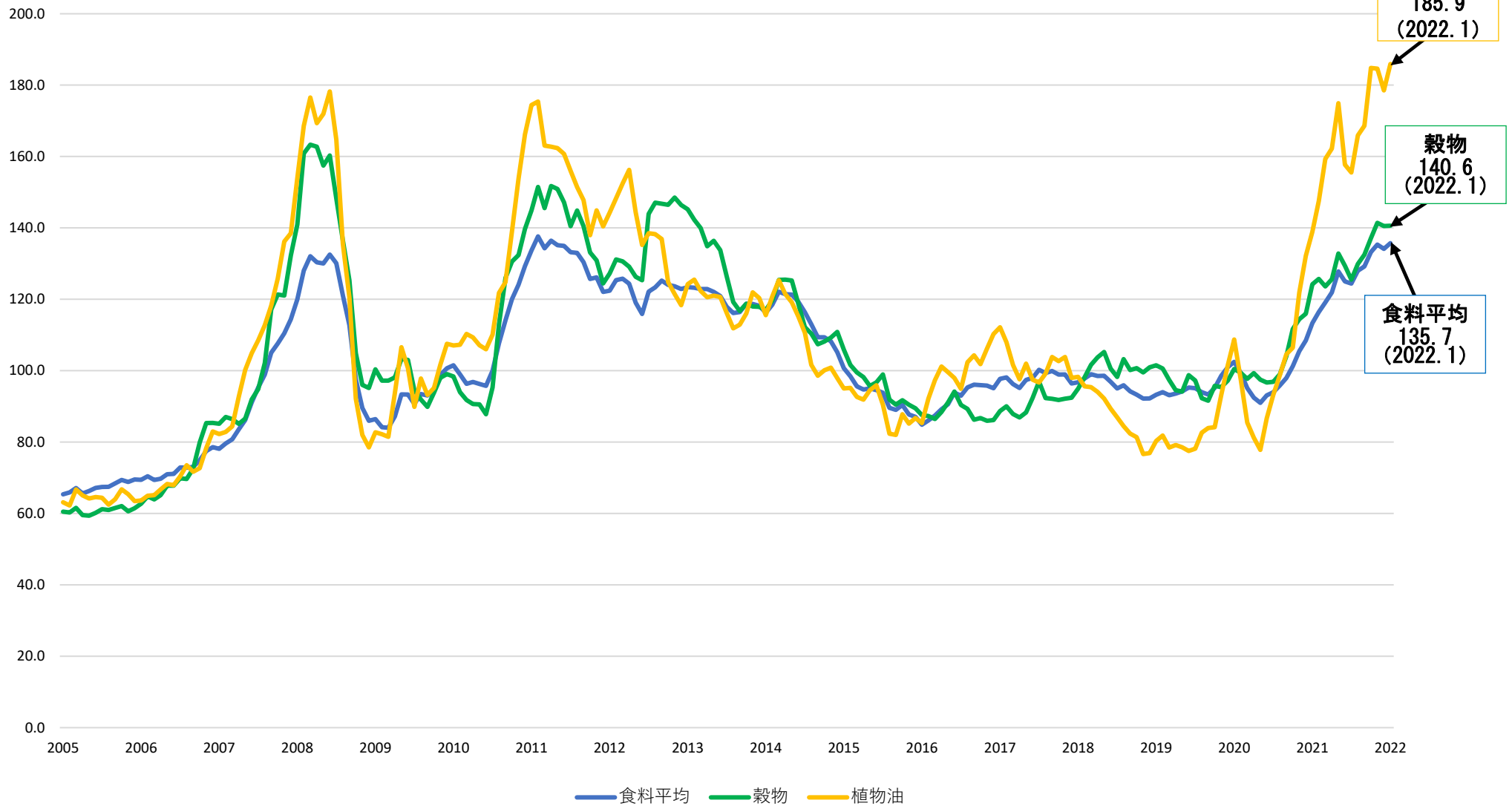
大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.2)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和4年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.3～124.6（前年同月比で－1.3%～25.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和3年8月～令和4年1月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3					R4	
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.4	99.3	99.6	99.7	100.0	103.2	4.0%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	100.2	99.6	100.9	101.0	98.5	100.4	0.3%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	100.8	101.6	102.0	102.6	102.5	102.3	2.0%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	107.9	113.9	118.1	120.5	121.6	124.6	25.6%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	98.9	100.0	99.2	99.6	97.6	98.3	－0.5%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	110.2	111.2	112.4	112.5	112.0	112.3	12.9%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	100.6	100.6	98.4	95.9	95.3	98.5	－1.3%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.8	99.9	99.9	99.8	99.9	99.7	－0.1%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.1	100.4	100.7	101.0	100.9	101.2	1.3%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和3年8月～令和4年2月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	97.5	98.8	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	3.1%	5.6%
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.0	99.0	99.0	99.0	97.8	98.4	98.4	0.0%	−1.2%
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	101.1	105.0	100.7	101.1	100.7	101.6	101.1	−0.5%	−0.5%
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	106.1	109.0	112.8	115.3	116.3	119.1	122.9	3.2%	26.3%
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	99.0	102.7	98.4	98.8	97.5	97.7	98.1	0.4%	−2.3%
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	105.9	106.6	106.6	106.6	105.6	105.9	105.9	0.0%	7.0%
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	99.1	103.0	98.6	93.6	92.1	98.6	98.6	0.0%	−2.4%
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.5	99.5	99.9	99.7	99.7	99.7	99.7	0.0%	−0.2%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2021/22 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・英国、カザフスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

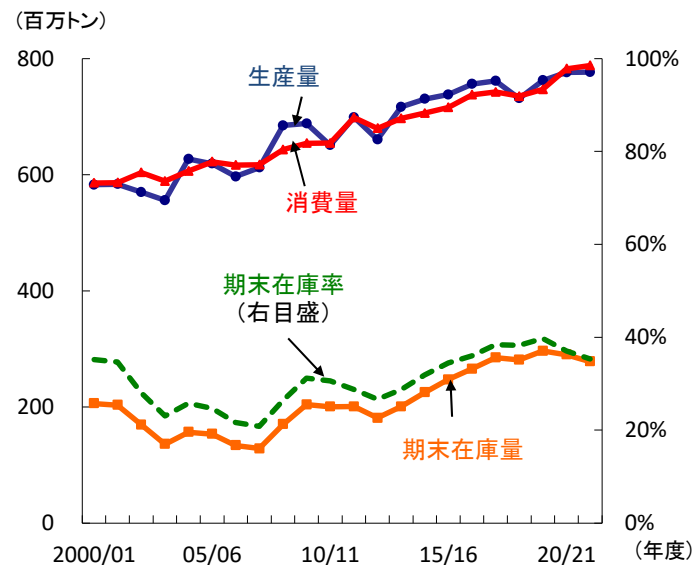
消費量 前年度比 前月比

- ・中国等で下方修正も、カナダで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・米国、ウクライナ等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2022. 2. 9) をもとに農林水産省で作成

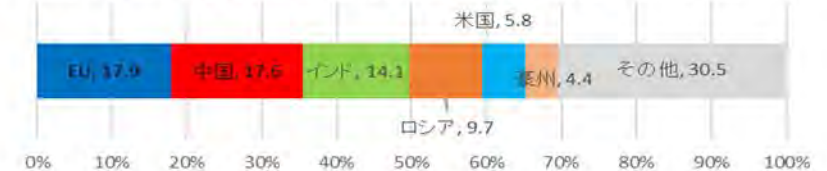
◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	762.2	775.9	776.4	▲ 2.2	0.1
消 費 量	746.7	782.5	788.1	0.6	0.7
うち飼料用	139.7	157.7	160.7	1.1	1.9
輸 出 量	193.9	202.7	206.7	2.3	2.0
輸 入 量	188.4	194.8	204.8	2.2	5.1
期末在庫量	296.5	289.9	278.2	▲ 1.7	▲ 4.0
期末在庫率	39.7%	37.0%	35.3%	▲ 0.2	▲ 1.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (9 February 2022)

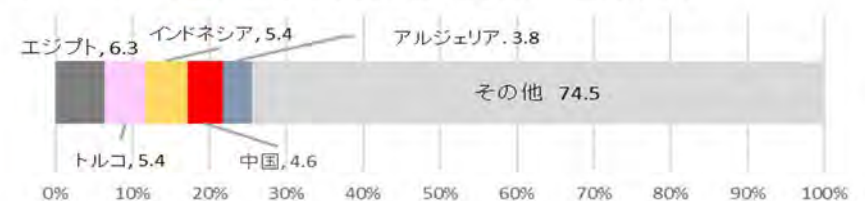
○ 2021/22年度の世界の小麦の生産量 (776.4百万トン) (単位：%)



○ 2021/22年度の世界の小麦の輸出量 (206.7百万トン)



○ 2021/22年度の世界の小麦の輸入量 (204.8百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2021/22 年度の輸出量は過去 6 年で最低

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、44.8 百万トンの見込み。そのうち、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ 34.8 百万トン(対前年度比 9.0%増)、9.0 百万トン(同 43.6%減)、1.0 百万トン(同 46.1%減)である。

同「Winter Wheat and Canola Seeding」(2022.1.12)によれば、2022/23 年度の冬小麦の播種は、11 月末にほぼ終了し、播種面積は前年度より 2 %増加の 13.9 百万ヘクタールの見込み。秋期の高水準の小麦価格で小麦の播種が促進された。冬小麦の播種面積は、2020/21 年度に 111 年で最低の播種面積に落ち込み、その後 2 年連続で上昇した。品種別播種面積は、ハード・レッド・ウインター(HRW)が 9.6 百万ヘクタール(対前年度比 1 %増)、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が 2.9 百万ヘクタール(同 6 %増)、ホワイト・ウインターが 1.4 百万ヘクタール(同 2 %増)。

生育状況は、2 月 8 日現在、冬小麦生産地の 71%で干ばつとなっており、1 月より悪化している。冬の低温が続く期間に定温を維持する積雪がないと、作物が凍結被害を受ける可能性がある。しかしながら、冬小麦にとっては、冬期の生育条件が生産量の主要な決定要素ではなく、春期の生育条件が単収に大きな影響を与える傾向がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、消費量は、前月予測からデュラム小麦の需要の減少や種子用小麦の需要の減少から 0.1 百万トン下方修正されたが、前月を 1.2%上回る 30.8 百万トン。

輸出量は、HRW やホワイト小麦の輸出量の減少により前月予測から 0.4 百万トン下方修正され、前年度に比べ 18.3%減少の 22.1 百万トンの見込み。春小麦の干ばつによる減産により、過去 6 年間で最低の水準となっている。中でもハード・レッド・スプリングは過去 30 年間で最低の輸出数量が見込まれている。なお、米国産小麦の価格高騰により、中国は史上最高の豊作となった豪州産に輸入先を切り替えている。1 月の輸出先国(輸出検証高)は、日本が 0.3 百万トン(16%)、メキシコが 0.3 百万トン(15%)、フィリピンが 0.2 百万トン(12%)の順。

2021/22 年度の期末在庫量は、前月予測より 0.5 百万トン上方修正され 17.6 百万トンとなるものの、2013/14 年度以降最小の見込み。

小麦－米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位: 百万トン)

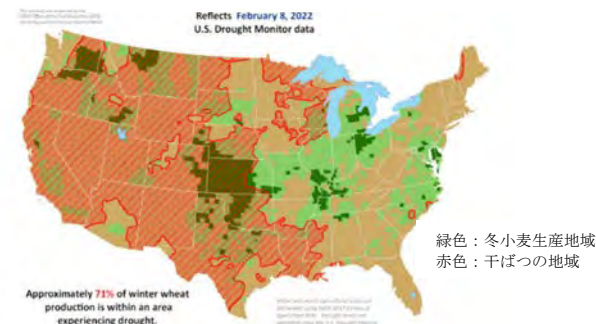
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.6	49.8	44.8	-	▲ 10.0
消 費 量	30.4	30.5	30.8	▲ 0.1	1.2
うち飼料用	2.6	2.6	3.0	-	15.4
輸 出 量	26.4	27.0	22.1	▲ 0.4	▲ 18.3
輸 入 量	2.8	2.7	2.7	-	▲ 0.4
期末在庫量	28.0	23.0	17.6	0.5	▲ 23.3
期末在庫率	49.3%	40.0%	33.3%	1.3	▲ 6.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	15.13	14.89	15.04	-	1.0
単収(t/ha)	3.47	3.34	2.98	-	▲ 10.8

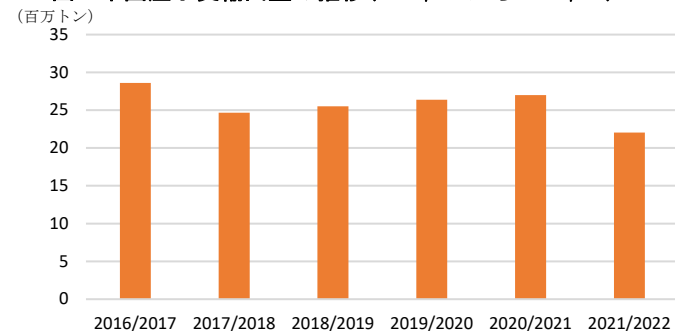
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(9 February 2022)

図 米国産冬小麦産地と干ばつ状況(2 月 8 日時点)



資料: USDA「Wheat outlook:February 2022」(2022.2.11)

図 米国産小麦輸出量の推移(2016/17 から 2021/22)



資料: USDA「PS&D」(2022.2.11)をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2021/22 年度末在庫は減産により過去最低の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 21.7 百万トンとカナダ西部の干ばつの影響を受け前年度に比べ 38.5%減少し、2008/09 年度以降最低水準。

カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook For Principal Field Crops」(2022.2.18)によれば、生産量は前月予測からの変更はなく 21.7 百万トンで、デュラム小麦は前年度から 60%減少の 2.7 百万トン、普通小麦は前年度から 34%減少の 19.0 百万トンの見込み。

また、AAFC によれば、2022/23 年度の播種面積は、前年度(9.49 百万ヘクタール)から 10.4%増加の 10.05 百万ヘクタール。生産量は前年度(21.7 百万トン)から 43.9%増加の 31.2 百万トンとなる見込み。そのうち、デュラム小麦は高水準な価格や、堅調な世界の需要等から播種面積は前年度から 9%増加の 2.45 百万ヘクタール。干ばつで減少した単収が回復すると生産量は前年度(2.7 百万トン)の約 2 倍の 5.5 百万トンと最近 5 年平均並となる見込み。また、普通小麦も高水準な価格や、在庫量の逼迫から、播種面積は前年度から 5%増加し 7.60 百万ヘクタールの見込み。

なお、普通小麦のうち、春小麦の播種面積は前年度から 6%増加し 7.05 百万ヘクタール、冬小麦は前年度から 1%増加し 0.55 百万ヘクタールの見込み。

また、単収が 3.44 トン/ヘクタールと干ばつ被害被害を受けた 2021/22 年度から回復する見通しで、生産量は前年度から 35.0%増加し 25.6 百万トンと最近 5 年平均を上回る見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 15.2 百万トンと、2005/06 年度以降最低の見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、12 月の輸出量は普通小麦が 0.7 百万トン、デュラム小麦は 0.1 百万トンの計 0.8 百万トンで、輸出先国は、普通小麦は中国(16.3%)、フィリピン (10.8%)、コロンビア(10.7%)、デュラム小麦はイタリア(27.5%)、日本(19.1%)、ペルー (16.8%)の順。

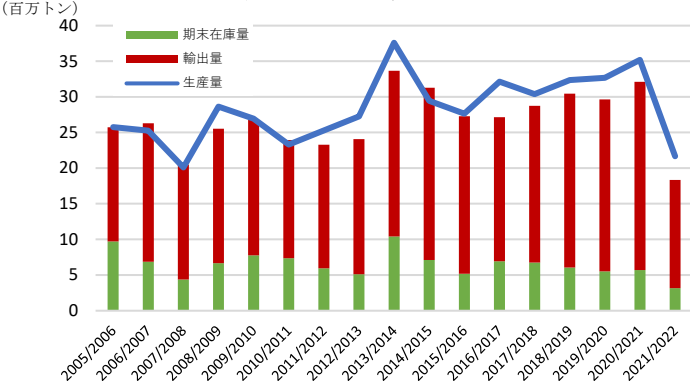
USDA によれば、期末在庫量は 3.1 百万トンと対前年度比 44.8%減、1960 年以降で最低の見込み。2021/22 年度の実産量の大幅な減少が要因となっている。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	32.7	35.2	21.7 (21.7)	-	▲ 38.5
消 費 量	9.8	9.1	9.6 (8.2)	1.7	5.4
うち飼料用	4.6	4.2	4.5 (4.1)	1.7	8.2
輸 出 量	24.1	26.4	15.2 (15.4)	0.2	▲ 42.5
輸 入 量	0.7	0.6	0.6 (0.2)	▲ 0.1	9.1
期末在庫量	5.5	5.7	3.1 (4.0)	▲ 2.0	▲ 44.8
期末在庫率	16.2%	16.0%	12.7% (17.0%)	▲ 9.8	▲ 3.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.66	10.02	9.25 (9.25)	-	▲ 7.7
単収(t/ha)	3.38	3.51	2.34 (2.34)	-	▲ 33.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(18 February 2022)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2022.2.9)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦及びデュラム小麦の輸出先国(2021年12月)
＜普通小麦＞ ＜デュラム小麦＞

順位	国名	普通小麦		順位	国名	デュラム小麦	
		輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)			輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
1	中国	11.4	16.3	1	イタリア	2.8	27.5
2	フィリピン	7.5	10.8	2	日本	1.9	19.1
3	コロンビア	7.5	10.7	3	ペルー	1.7	16.8
4	英国	6.4	9.2	4	米国	1.4	14.2
5	エクアドル	6.4	9.1	5	ナイジェリア	1.3	12.8
6	その他	30.6	43.9	6	その他	1.0	9.7
計		69.7	100.0	計		10.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2 普通小麦の品種はNO. 1-3 Canada Western Red Spring, No. 2 Canada Prairie Spring, No. 1 Canada Western

< 豪州 > 2021/22 年度の生産量、輸出量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の 34.0 百万トンの見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2021.11.30)によれば、2021/22 年度の実産量は 2 年連続して過去最高を更新し、34.4 百万トンの見込み。主要生産州別の生産量は、ニューサウスウェールズ (NSW) 州では、生産量は前年度より 7 %減少するものの、5 年平均の約 2 倍の 12.2 百万トンの見込み。西オーストラリア(WA)州は、前年度より 23%増加の 11.7 百万トンと史上最高の見込み。なお、GIWA(西オーストラリア州穀物協会)の 2 月レポート(2022.2.11)によれば、生産量は 12.9 百万トンと対前年度比 4 割増の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、25.5 百万トンと、2 年続きの豊作から史上最高となる見込み。

豪州統計局によれば、12 月の輸出量は、前月(1.6 百万トン)に比べ 2.2 百万トンと増加。輸出先国は、中国(32%)、インドネシア(10%)、日本(8%)の順。また、2021 年計の輸出先国はインドネシア(19%)、ベトナム(12%)、中国(12%)で、輸出先国の上位はアジア向けとなっている。12 月の中国向け輸出の割合は 32%とここ数か月、大幅に増加している。現地情報会社によれば、中国の豪州産小麦への輸入需要は、北米の減産と、中国が他地域産に比べ距離的に近い豪州産を選択し原油高騰により増大した輸送コストを抑制するためと見られている。また、北米の高品質小麦の減産により豪州産の需要が高まっているが、豪州産小麦は一部で品質が低下しており輸出機会は限定的と見られている。一方、インドネシア、フィリピン、ベトナムでは、飼料用小麦向けの低品質小麦の需要が高いが、地理的に近い豪州からの輸送コストが低く競争力が強い。なお、豪州産小麦は価格競争力があるものの、アフリカ、南アジア向け輸出は、地理的な要因から黒海周辺諸国や欧州諸国の輸出、インドの豊作もあり輸出機会は限定的である。

本年度は収穫量が多いため、サプライチェーンの随所で物流問題が生じている模様。また、カナダ、米国の生産量の減少に伴う豪州産穀物への需要集中で港湾能力が追いつかない状況が続いており、輸出コストの上昇にも注視が必要である。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	14.5	33.3	34.0 (35.5)	-	2.1	
消 費 量	8.0	8.0	8.5 (9.5)	-	6.3	
うち飼料用	4.5	4.5	5.0 (5.7)	-	11.1	
輸 出 量	9.1	23.9	25.5 (24.0)	-	6.9	
輸 入 量	0.9	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	2.7	4.3	4.5 (6.6)	-	4.6	
期末在庫率	15.6%	13.6%	13.3% (19.7%)	-	▲ 0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.86	12.90	13.10 (13.0)	-	1.6	
単収(t/ha)	1.47	2.58	2.60 (2.47)	-	0.8	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

写真 収穫の進む豪州(NSW 州)の圃場(2022. 1. 27)



1 月中旬に大雨が降り、収穫作業を中断していたため、遅れてこの日収穫作業が行われた。
品質は、降雨過多により飼料用途の GP (General Purpose) となった。

表 豪州の小麦輸出先国別輸出量

(万トン)

2021年12月			2021年1月～12月		
国名	輸出量	シェア(%)	国名	累積輸出量	シェア(%)
中国	71.5	32.2	インドネシア	493.4	19.3
インドネシア	22.7	10.2	ベトナム	302.6	11.8
日本	17.4	7.8	中国	294.3	11.5
マレーシア	17.3	7.8	フィリピン	199.0	7.8
ベトナム	12.7	5.7	日本	121.6	4.8
その他	80.4	36.2	その他	1146.3	44.8
合計	222.0	100.0	合計	2,557.3	100.0

資料: 豪州統計局のデータをもとに農林水産省で加工

< EU27+英国 > 2022/23 年度の冬小麦はおおむね良好に越冬

【生育・生産状況】EU 委員会「EU Cereals Production Area and Yield」(2022.1.17)によれば、2021/22 年度の EU27 ヶ国の生産量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、139.3 百万トン。

このうち、普通小麦は前月に比べわずかに下方修正され、131.6 百万トンとなったが、前年度を 10.3%上回る見込み。国別には、イタリア等でわずかに下方修正された。一方、デュラム小麦は、前月に比べ上方修正され 7.7 百万トンとなり、前年度を 5.0%上回る見込み。国別には、イタリア等で上方修正された。また、英国環境・食料・農村地域省(DEFRA)「Farming Statistics – final crop areas, yields, livestock populations and agricultural workforce at 1 June 2021」(2021. 12.16)によれば、英国の 2021/22 年度の実績は、14.0 百万トンの見込み。

この結果、EU27 ヶ国と英国の合計生産量は 153.3 百万トンとなる見込み。

1 月は地域全体で乾燥した気候が続いたが、イングランドとフランス東部の休眠中の小麦は、土壌水分量が十分であり、良好な状態で越冬しているとみられる。スノーカバー(土壌を保温する効果がある積雪)は大陸東部で見られるのみであるが、冬枯れの可能性のある夜間最低気温を上回っているため、冬枯れ懸念は発生していない。イベリア半島等の南部では、1 月半ばに冬作物が半休眠期から生育期に入る地域も見られ、一部で乾燥懸念がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の EU と英国の消費量の計は前月予測から変更なく 123.0 百万トンの見込み。輸出量は、前月予測からわずかに上方修正され、38.2 百万トンの見込み。輸出税の賦課や 2 月からの輸出枠設定によるロシアの輸出量の減少に伴い、ロシアの主要輸出国であるエジプト市場等では価格競争力のある EU が輸出を伸ばすと見られている。また、フランスでは、2021 年 5 月～9 月まで実績のなかった中国向けの輸出が 10 月から再開されている。

2 月 8 日現在の EU の輸出価格 (FOB) は、主要な輸出先であったアルジェリアが黒海地域に輸入先を変更した影響を受け、先月から 9 ドル/トン下落し 310 ドル/トンとなった。減産となった米国やカナダと比べて安価となっている。(右図)

USDA によれば、2021/22 年度の EU27 ヶ国の期末在庫量は 1999/00 年度以降最低の 9.9 百万トンの見込み。

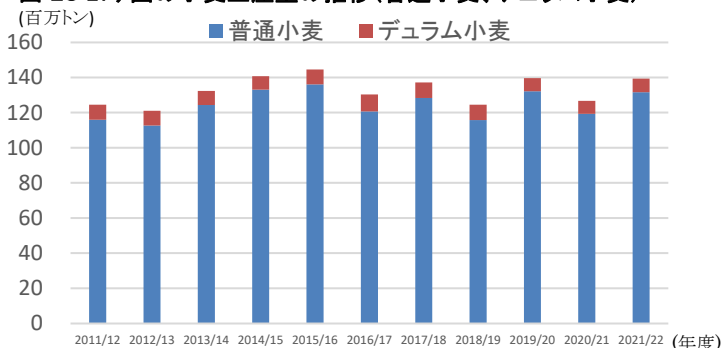
小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	154.4	136.6	152.9 (152.0)	▲ 0.3	11.9
消費量	122.5	118.2	123.0 (121.0)	-	4.0
うち飼料用	53.2	48.5	52.9 (48.8)	-	9.1
輸 出 量	41.4	30.2	38.2 (35.3)	0.0	26.5
輸 入 量	7.3	8.6	7.5 (7.2)	0.3	▲ 12.8
期末在庫量	15.6	12.4	11.6 (14.0)	-	▲ 6.1
期末在庫率	9.5%	8.3%	7.2% (9.0%)	▲ 0.1	▲ 1.1

(参考)
収穫面積(百万ha) 26.16 24.36 25.93 (25.49)
単収(t/ha) 5.90 5.61 5.90 (5.96)
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)
表内及び () 内のデータは EU27 ヶ国+英国のデータ

図 EU27 ヶ国の小麦生産量の推移(普通小麦、デュラム小麦)



資料: 欧州委員会「EU Cereals Production, Area and Yield(2021.1.27)」をもとに農林水産省で作成

図 小麦主要輸出国の輸出価格 (FOB) の推移



資料: USDA「Grain World Markets and Trade(2022.2.9)」

＜ 中国 ＞ 2021/22 年度の輸入量は前年度に比べ 23.3%減少する見込み

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.2.9)によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測から変更なく 136.9 百万トンで、史上最高の見込み。作期別には、冬小麦は 129.2 百万トン、春小麦は 7.7 百万トン。

中国中央气象台(2022.2.5)によれば、2022/23年度の冬小麦は、多くの地域で越冬期を迎えている。生育条件は、1 月に 3 度の大規模なみぞれにより土壌水分が補給された。また、南部の四川省、雲南省、貴州省の大部分では分げつ期から節間伸長期に入っており、一部は穂孕みから開花期に入っている。南部では平年より降水量が 5～9 割多く、生育は良好に推移している。

中国農業農村部は、食料安全保障の観点から、食糧生産量を 6.5 億トン以上に安定させる目標を定めた。そのうち、小麦は 2025 年までに単位面積当たりの収量を引き上げることにより、生産量を 1.4 億トン以上にするとしている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、2021/22 年度の輸入量は前月予測からの変更はなく 8.0 百万トンで、前年度に比べ 23.3%減少する見込み。中国海関統計によれば、2021 年 1 月から 12 月の小麦輸入量は、前年(8.2 百万トン)を 19.2%上回る 9.7 百万トン。同期間の輸入量は 7 月から 10 月にかけて減少傾向であったが、11 月以降に増加に転じた。2021 年の輸入先国は、豪州 (28.1%)、米国(28.1%)、カナダ(26.1%)の順で、12 月に輸入量が増加した豪州産がわずかに米国産を上回った。なお、この 3 カ国で全体の 82.3%を占めている。また、10 月よりフランス産の輸入が再開されている。また、本年 2 月 4 日には、ロシア産小麦の輸入に関する植物検疫上の地域限定について、その撤廃に合意した(→詳細は注目情報参照)。

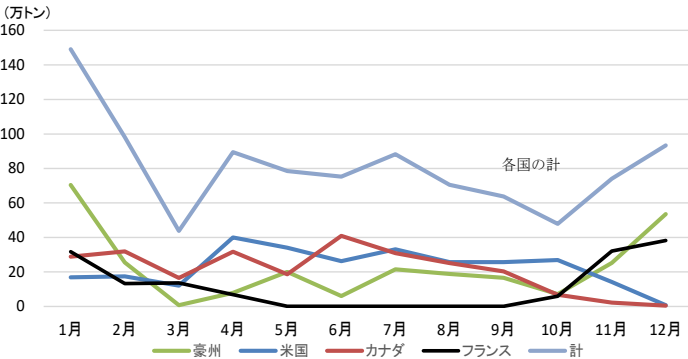
農業農村部「農産品供需形勢分析月報12月号」によれば、12月上旬は、市場における売り惜しみ心理が比較的強く、12月中旬になっても、製粉業者の強い需要に支えられ、国内小麦価格は引き続き上昇した。しかし、12月下旬に入ると、1 月の政府備蓄小麦の競売の再開による需給の緩和と見通しが重しとなり、製粉企業の買付価格は小幅に下落している。春節前の価格の上昇余地は限られていると思われる。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	133.6	134.3	137.0	(137.1)	-	2.0
消費量	126.0	150.0	147.5	(146.5)	▲ 1.0	▲ 1.7
うち飼料用	19.0	40.0	35.0	(33.4)	▲ 1.0	▲ 12.5
輸 出 量	1.1	0.8	0.9	(1.3)	-	18.4
輸 入 量	5.4	10.6	9.5	(10.6)	-	▲ 10.5
期末在庫量	150.0	144.1	142.2	(128.3)	1.0	▲ 1.4
期末在庫率	118.1%	95.6%	95.8%	(86.8%)	1.3	0.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.73	23.38	23.57	(23.8)	-	0.8
単収(t/ha)	5.63	5.74	5.81	(5.76)	-	1.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

図 中国の小麦輸入先国(上位4ヶ国)の推移(2021年1月～同年12月)



資料：海関統計を農林水産省で加工

表 中国の小麦輸入先国(2021年12月、2021年1月～2021年12月、2020年1月～2020年12月)

2022年12月			2021年1月～2021年12月			2020年1月～2020年12月		
国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
豪州	53.6	57.4	豪州	273.4	28.1	カナダ	229.7	28.2
フランス	38.2	40.9	米国	272.6	28.1	フランス	238.3	29.2
米国	0.7	0.7	カナダ	254.0	26.1	米国	178.4	21.9
カナダ	0.4	0.4	フランス	141.6	14.6	豪州	109.0	13.4
カザフスタン	0.4	0.4	カザフスタン	18.7	1.9	リトアニア	33.3	4.1
その他	0.2	0.2	その他	6.6	0.7	その他	26.4	3.2
計	93.3	100.0	計	971.8	100	計	815.2	100.0

出典：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠 800 万トンを設定

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量(クリミア地域分を含まない)は、前月予測からの変更はなく、75.5 百万トンと前年度に比べ 11.5%減の見込み。

ロシア農業省の速報値によれば、2022/23 年度の冬穀物の播種面積は、12 月 17 日時点で 18.4 百万ヘクタール(前年度比 4.4%減)。ロシア気象センターによれば、冬小麦は越冬期に入っている。1 月は、気温が平年より高くなったものの、スノーカバーが保持されており影響はなかった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測から変更なく 35.0 百万トンの見込み。ロシア産小麦は、エジプト市場でウクライナ産や EU 産に代替される一方、2021 年に不作となったトルコ、イラン向けの輸出量は増加した。

なお、可変輸出関税額は、前年 7 月から 8 月にかけて低下し輸出を下支えしたが、8 月末から上昇を続け、12 月中旬以降 90 ドル/トンを超えた。その後 6 週連続して下落しているが 90 ドル台を維持している。輸出量は、前年 8 月から 9 月にかけて 5.0 百万トン台まで増加したものの、輸出税の上昇に伴い、10 月には 2.0 百万トン台に減少した。その後、11 月に輸出量は再び増加し 3.2 百万トン、12 月は 3.0 百万トンとなった。

ロシア政府は 1 月 31 日以降、穀物輸出関税を 3 段階の累進式に変更。算定方式は次の通り。2 月 15 日以降は枠内に適用される。

①第 1 段階：指標価格(※)が 1 トン当たり 200 ドルを超え 375 ドルまでの場合。

指標価格と 200 ドルの差に 70%の関税率を適用し税額を算出。

②第 2 段階：同価格が 1 トン当たり 375 ドルを超え 400 ドルまでの場合。

指標価格と 375 ドルの差に 80%の税率を適用した税額を①の税額に加算。

③第 3 段階は、同価格が 1 トン当たり 400 ドルを超えた場合。

指標価格と 400 ドルの差に 90%の税率を適用した税額を①及び②の税額に加算。

同時に、2022 年 2 月 15 日から 6 月 30 日までの小麦の輸出枠を 800 万トンとし、とうもろこし、ライ麦、大麦の輸出枠計 300 万トンとあわせて、2 月 8 日には 206 業者に配分した。なお、前年と同様にユーラシア経済同盟加盟国等への輸出は対象外で、今後、輸出枠の設定は毎年実施

小麦－ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

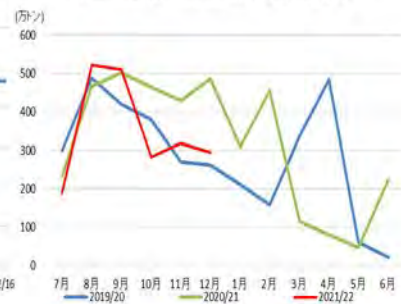
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	73.6	85.4	75.5 (75.0)	-	▲ 11.5
消 費 量	40.0	42.5	41.8 (42.4)	-	▲ 1.8
うち飼料用	17.0	19.0	18.5 (18.0)	-	▲ 2.6
輸 出 量	34.5	39.1	35.0 (33.4)	-	▲ 10.5
輸 入 量	0.3	0.4	0.5 (0.2)	-	25.0
期末在庫量	7.2	11.4	10.6 (12.2)	-	▲ 6.6
期末在庫率	9.7%	13.9%	13.9% (16.1%)	-	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.31	28.68	27.60 (28.0)	-	▲ 3.8
単収(t/ha)	2.70	2.98	2.74 (2.68)	-	▲ 8.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

図 ロシア産小麦の可変輸出関税額の推移(6月2日から1月19日)



図 ロシアの最近3か年の月別小麦輸出量の推移



資料：ロシア農業省の公表資料をもとに農林水産省で作成 資料：ロシア税関統計をもとに農林水産省

新方式の穀物輸出関税額の具体例

例1 小麦の指標価格が390^円/tの場合
第1段階分が122.5^円/t。(375-200)*0.7=122.5
第2段階分が12^円/t。(390-375)*0.8=12
の合計で輸出関税額は134.5^円/tとなる。
(現行の算定方式なら133^円/t)。

例2 小麦の指標価格が420^円/tの場合
第1段階分が122.5^円/t。
第2段階分が20^円/t。
第3段階分が18^円/t。(420-400)*0.9=18
の合計で、輸出関税額は160.5^円/tとなる
(現行の算定方式なら154^円/t)。

するとされている。また、2月4日、植物検疫上、いままでアルタイ地域など7地域産に限定されていたロシア産小麦・大麦の中国向け輸出について、地域限定の解除に合意した。これにより、中国向けに主産地の欧州地域の小麦の輸出が可能となった。(→詳細は注目情報参照)

※指標価格：ロシア連邦農業省が毎週金曜日に前週の FOB(ノボロシスク港) 価格の平均値として算出し、輸出関税額とともに公表

ロシアの小麦輸出と輸出規制の影響<USDA 「Wheat outlook」(2022.2.11)>

2000年代以降の小麦の輸出増加は、北アフリカやアジアを中心とした途上国の人口増加や所得増加に伴うものであり、国際市場におけるロシア産小麦のシェアは2017/18年度にピークの22%に達した。その後、天候的な問題による生産量の減少と国内価格抑制のための輸出規制により、最近のシェアは低下している。

ロシア政府が2007年以降これまで7回にわたり実行した輸出規制は、国際価格の上昇の助長や、生産者のインセンティブの低下を招いており、このような措置はむしろ状況を悪化させる場合もあると指摘されている。現在の輸出規制においては、毎年2月15日から6月30日に導入される輸出枠の影響で、今後は輸出枠のない穀物年度(7月～6月)の前半に輸出が集中する可能性がある」と指摘されている。

可変輸出関税制度は、国際価格の上昇を招く可能性がある他、ロシア産小麦の価格競争力及び価格設定の柔軟性を損なうため、小麦輸入国は他の国に供給先をシフトしている。例えば、エジプトでは、2021/22年度、ロシア産小麦の買付が減少してウクライナ産とルーマニア産が増加している。トルコでは、2021年の輸入は、ロシア産はそれほど減少していないが、ウクライナ産は前年比2倍以上のペースとなっている。

(参考) ウクライナの小麦需給表

(2021/22年度のウクライナの小麦は史上最高の豊作)

(単位:百万トン)						
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	29.2	25.4	33.0 (33.0)	-		29.8
消 費 量	8.3	8.7	8.6 (8.6)	▲ 0.2		▲ 1.1
うち飼料用	2.2	2.6	2.5 (2.4)	▲ 0.2		▲ 3.8
輸 出 量	21.0	16.9	24.0 (24.5)	▲ 0.2		42.4
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-		▲ 23.1
期末在庫量	1.5	1.5	2.0 (1.5)	0.4		33.1
期末在庫率	5.1%	5.9%	6.2% (4.5%)	1.3		0.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.02	6.85	7.40 (-)	-		8.0
単収(t/ha)	4.16	3.71	4.46 (-)	-		20.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2021/22 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・フィリピン等で上方修正も、ブラジル、パラグアイ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

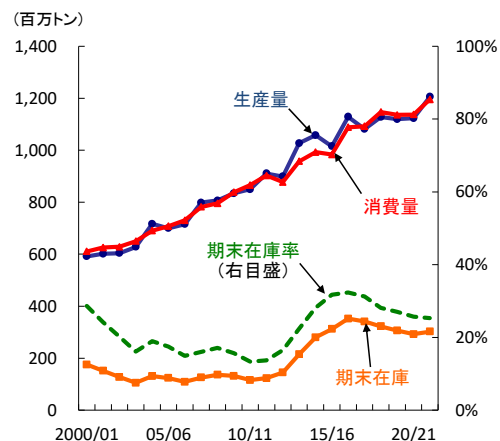
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・イラン、カナダ等で上方修正も、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・パラグアイ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.2.9）をもとに農林水産省にて作成

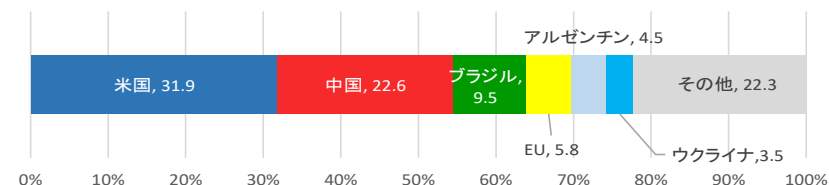
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

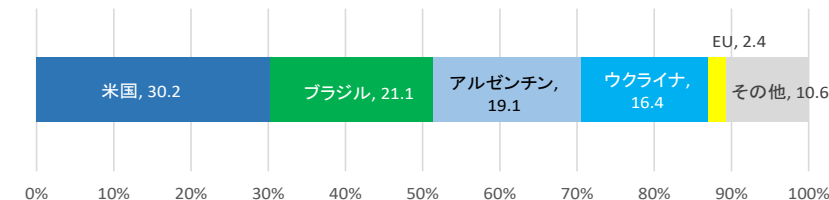
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,119.6	1,123.1	1,205.4	▲ 1.6	7.3
消 費 量	1,135.6	1,137.4	1,195.2	▲ 0.9	5.1
うち飼料用	715.7	721.5	751.9	0.8	4.2
輸 出 量	172.3	180.8	203.7	▲ 0.5	12.7
輸 入 量	167.8	185.8	188.2	1.4	1.3
期末在庫量	306.3	292.1	302.2	▲ 0.8	3.5
期末在庫率	27.0%	25.7%	25.3%	▲ 0.1	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 February 2022)

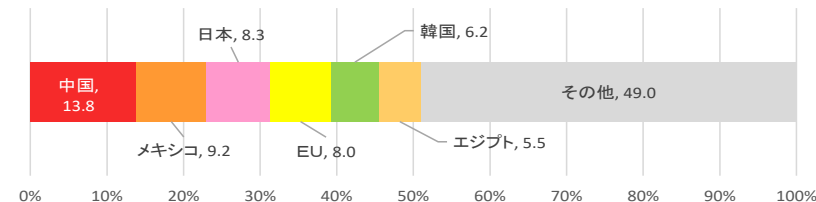
○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,205.4百万トン) (単位：%)



○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの輸出量(203.7百万トン)



○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの輸入量(188.2百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量史上第2位、エタノール用需要増、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の単収となったことから前年度より7.1%増の383.9百万トンと2016/17年度に次ぐ史上第2位の見込み。前年11月末時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要動向】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール用消費量の増加に牽引され、前年度より2.8%増の315.2百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の輸出量となった前年度より11.9%減の61.6百万トンの見込み。前年度の輸出は中国向け大量輸出が中心であったが、2021/22年度は輸出先が広がり、特にメキシコとカナダの北米市場向けが拡大している。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～2月3日)は、5.4百万トンであり、内訳はメキシコ(1.6百万トン)、中国(1.4百万トン)、日本(1.2百万トン)、コロンビア(0.5百万トン)の順である。

USDAによれば、2021/22年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より24.7%増の39.1百万トンの見込み。なお、期末在庫率は10.4%で依然として低水準の見込み。

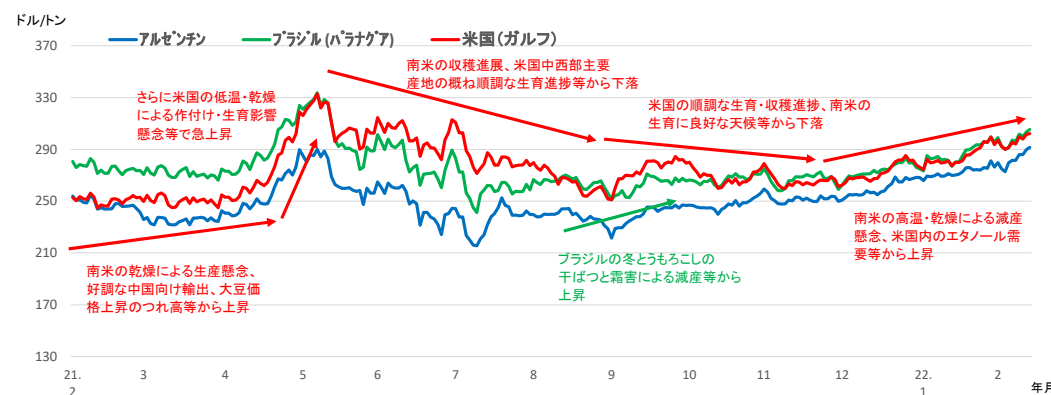
とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	346.0	358.5	383.9	－	7.1
消費量	309.6	306.5	315.2	－	2.8
うち飼料用	149.9	142.3	143.5	－	0.9
エタノール用等	123.4	127.7	135.3	－	5.9
輸 出 量	45.1	69.9	61.6	－	▲ 11.9
輸 入 量	1.1	0.6	0.6	－	3.2
期末在庫量	48.8	31.4	39.1	－	24.7
期末在庫率	13.7%	8.3%	10.4%	－	2.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	32.92	33.31	34.56	－	3.8
単収(t/ha)	10.51	10.76	11.11	－	3.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前年11月以降の南部の主要産地（パラナ州、リオ・グランデ・ド・スール州等）の高温・乾燥が1月も継続した影響で夏とうもろこしの単収がさらに下方修正されたことから前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、大豆収穫後、作付けされる冬とうもろこしの生産増見通しにより前年度より31.0%増の114.0百万トンとなり、史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.2.10）によれば、収穫中の2021/22年度の夏とうもろこしの生産量は、南部産地を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け前月予測から0.4百万トン下方修正され、前年度比1.2%減の24.4百万トンの見込み。一方、冬とうもろこしの生産量は、干ばつ・霜害の影響で大幅減産となった前年度に比べ41.0%増の87.9百万トンが見込まれ、合計では前年度比29.0%増の112.3百万トンで史上最高の見込み。（P.22 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部の主産地では1月下旬に降雨があったものの、これまでの高温・乾燥の影響を改善するには遅すぎた。一方、2月中旬までブラジル中西部から北東部で広く降雨が継続し、この地域の夏とうもろこしの成熟及び冬とうもろこしの初期生育は順調である。夏とうもろこしは、南部のパラナ州で2月7日現在、収穫進捗率は19%。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で2月10日現在、収穫進捗率は50%。中西部のマット・グロソ州では例年より早い大豆の収穫により、2月11日現在、冬とうもろこしの作付進捗率は57%となっている。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から0.5百万トン下方修正されたものの、依然として飼料用消費の増加に伴い、前年度より3.6%増の72.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、大幅減産となった前年度より2.1倍の43.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1月の輸出量は2.7百万トンで、前年同期（2.3百万トン）と比べ16.5%増となっている。内訳は、1位がエジプト60万トン、2位がイラン50万トン。

とうもろこし－ブラジル

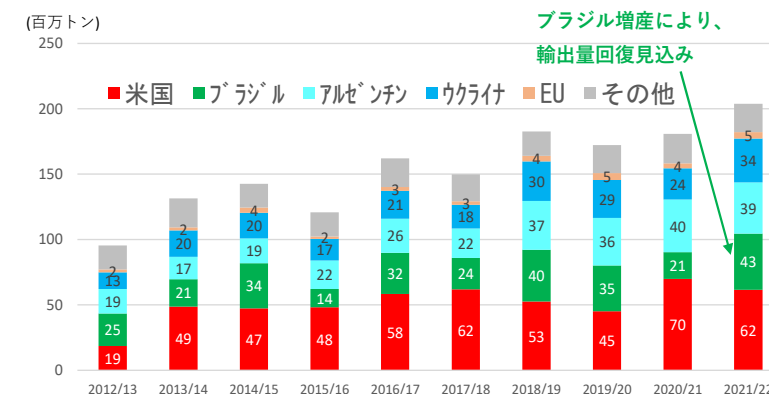
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	102.0	87.0	114.0	(112.9)	▲ 1.0	31.0
消 費 量	68.5	70.0	72.5	(74.1)	▲ 0.5	3.6
うち飼料用	58.5	59.0	61.5	(53.8)	▲ 0.5	4.2
輸 出 量	35.1	20.5	43.0	(39.0)	-	109.8
輸 入 量	1.7	3.0	2.0	(0.5)	-	▲ 33.3
期末在庫量	5.3	4.8	5.3	(6.4)	▲ 0.9	10.4
期末在庫率	5.1%	5.3%	4.6%	(5.7%)	▲ 0.8	▲ 0.7
(参考)						
収穫面積(百万ha)	18.50	19.90	20.80	(20.94)	-	4.5
単収(t/ha)	5.51	4.37	5.48	(5.39)	▲ 0.05	25.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2022.2.9）のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 高温・乾燥も、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 4.9%増の 54.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.2.17）によれば、収穫進捗率は 1.7%。作柄は良から並みが 74%で前週（72%）から改善した。遅植えとうもろこしの作柄は今後数週間の降雨が重要。ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要である。

【需給状況】USDA によれば、2021/22 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 3.7%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度より 3.0%減の 39.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2021 年 1～12 月の輸出量は 40.1 百万トンで、前年同期（37.0 百万トン）より 8.3%増。内訳は、1 位がベトナム 6.8 百万トン、2 位が韓国 4.9 百万トン、3 位がエジプト 3.1 百万トン。前年 7 月 26 日に発令された 180 日間のパラナ川の渇水の緊急事態宣言は前年末に終了したものの、パラナ川の水位は依然として低下傾向が続き、アルゼンチンの穀物等の輸出への影響に注視が必要である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣が 2021/22 年度のとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。同省プレスによれば、とうもろこしの輸出上限数量は 4,160 万トンで国内需給に影響しない量としている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	51.0	51.5	54.0 (61.0)	-	4.9	
消 費 量	13.5	13.5	14.0 (21.2)	-	3.7	
うち飼料用	9.5	9.5	10.0 (16.3)	-	5.3	
輸 出 量	36.3	40.2	39.0 (37.0)	-	▲ 3.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	3.6	1.4	2.4 (8.0)	0.3	71.1	
期末在庫率	7.3%	2.6%	4.6% (13.7%)	0.6	1.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.30	6.50	6.80 (8.30)	-	4.6	
単収(t/ha)	8.10	7.92	7.94 (7.35)	-	0.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの生育風景 (2月5日撮影)

前年 12 月から 1 月前半に水ストレスが発生した。
現在は成熟期で、収穫は 3 月末の予定。



< 中国 > 生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、大豆から収益性の良いとうもろこしの作付けにシフトしたことで収穫面積が増加したことから、前年度より4.6%増の272.6百万トンと史上最高の見込み。前年11月上旬時点で、収穫は終了。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より3.2%増の294.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より11.9%減の26.0百万トンの見込み。なお、2020/21年度の輸入量は、29.5百万トンと史上最高の見込み。

中国の貿易統計によれば、2021年1～12月の輸入量は28.4百万トンで、前年同期の2.5倍。内訳は、米国産19.8百万トン（70%）、ウクライナ産8.2百万トン（29%）で、前年はウクライナ産が56%を占めたが、米国産の輸入が大幅に増加した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2021年12月号」によると、12月の国内流通価格は、東北地区で市場への出荷が継続的に増加したこと国内とうもろこし市場の供給圧力が上昇し、2,820 元/トンと前月（2,880 元/トン）から低下した。また、12月の外国産価格は2,480 元/トンと前月（2,560 元/トン）から下落した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

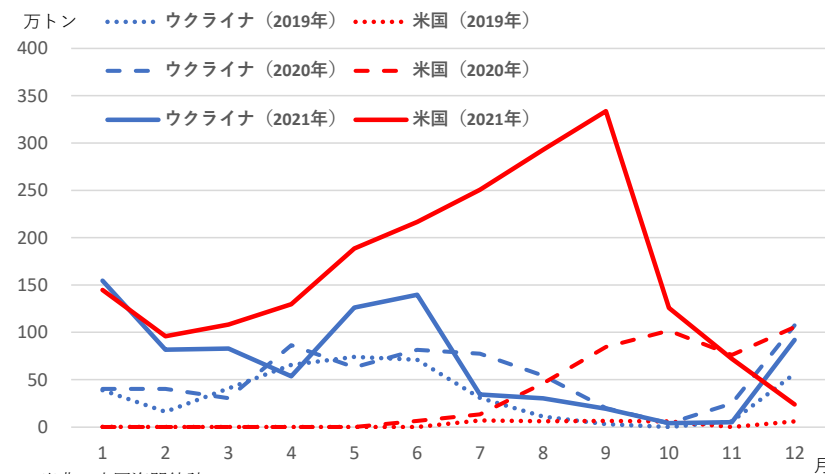
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.8	260.7	272.6 (272.6)	-	4.6	
消 費 量	278.0	285.0	294.0 (293.2)	-	3.2	
うち飼料用	193.0	203.0	214.0 (191.0)	-	5.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	7.6	29.5	26.0 (16.5)	-	▲ 11.9	
期末在庫量	200.5	205.7	210.2 (190.2)	-	2.2	
期末在庫率	72.1%	72.2%	71.5% (64.8%)	-	▲ 0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.28	41.26	43.32 (43.32)	-	5.0	
単収(t/ha)	6.32	6.32	6.29 (6.29)	-	▲ 0.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：中国におけるウクライナ・米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2021/22 年度

生産量 前年度比 前月比

・パキスタン等で上方修正されたことから前月から上方修正された。史上最高の見込み。

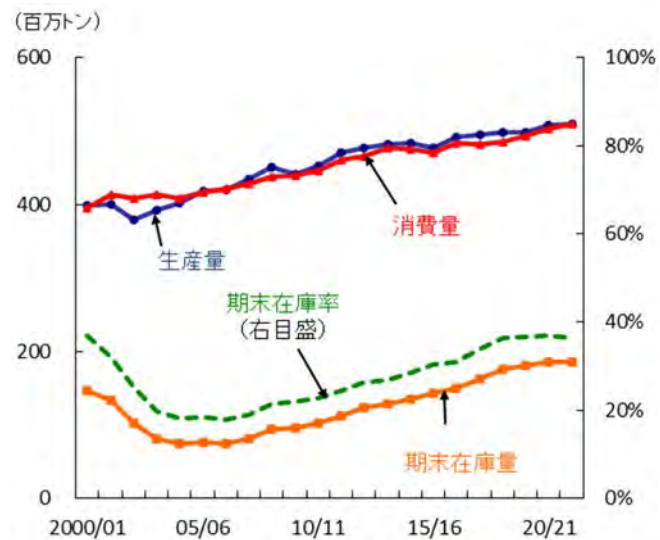
消費量 前年度比 前月比

・ナイジェリア等で上方修正されたことから前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・インド等で上方修正されたことから前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料：USDA「PS&D」（2022.2.9）をもとに農林水産省にて作成

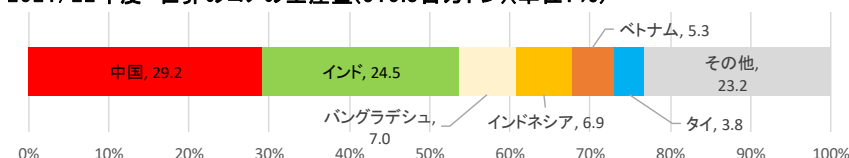
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

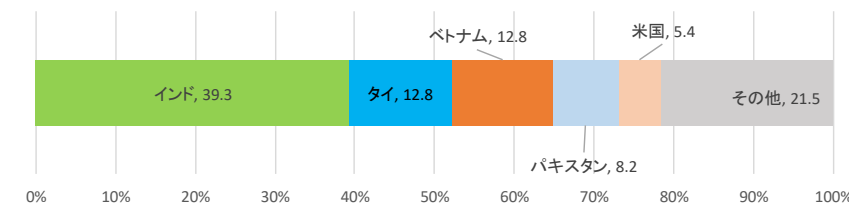
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	498.9	507.5	510.3	0.4	0.6
消費量	493.8	502.7	510.4	0.1	1.5
輸出量	43.4	50.6	50.9	1.0	0.5
輸入量	42.4	46.5	49.7	1.1	7.0
期末在庫量	181.7	186.4	186.3	0.3	▲ 0.0
期末在庫率	36.8%	37.1%	36.5%	0.0	▲ 0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 February 2022）

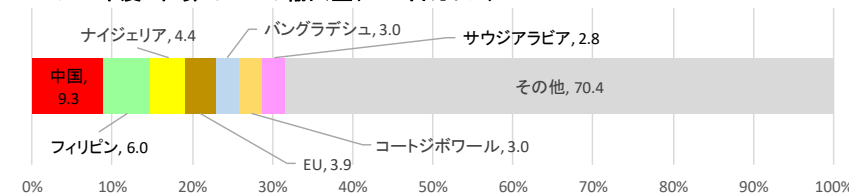
○ 2021/22年度 世界のコメの生産量(510.3百万トン)(単位：%)



○ 2021/22年度 世界のコメの輸出量(50.9百万トン)



○ 2021/22年度 世界のコメの輸入量(49.7百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2021/22 年度の期末在庫が対前年度比で 23%以上減少の見通し

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 15.7%減の 6.1 百万トンの見込み。収穫面積が減少したのは、ミシシッピ川下流域で作付け時期にとうもろこしと大豆の価格がより有利になると予測されたこと、カリフォルニア州で深刻な干ばつが発生したこと、南部で春先まで降雨が続き作付けが減少したことなどが要因。なお、単収は 8.64 もみトン/ヘクタールとなり史上最高。中・短粒種の生産量はコメ全体の約 25%を占める。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 4.7%減の 4.6 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、12 月までの輸出実績や輸出成約状況等に基づき、前月予測からわずかに下方修正され、対前年度比 7.4%減の 2.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸入量は、歴史的に高い運賃や世界的なコンテナ不足等の制約により、米国領プエルトリコへのタイ等からの中短粒種の輸入が遅れていることから、前月予測からわずかに下方修正され、対前年度比 10.2%減の 1.0 百万トンの見込み。

2021/22 年度の期末在庫量は、輸入量が下方修正された一方で、輸出量も下方修正されたことから、前月予測からわずかに上方修正され、対前年度比 23.7%減の 1.1 百万トンの見込み。

同「Rice Outlook」(2022.2.11)によれば、2月8日までの週の地中海向けカリフォルニア米(1等、碎米4%混入、国内精米)の価格は、1月11日までの週より5ドル上昇し、史上最高値となる1,205ドル/トン。2月8日までの週のイラク向け長粒種(2等、碎米4%混入)の価格については、1月11日までの週から5ドル上昇し、610ドル/トン(P19の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

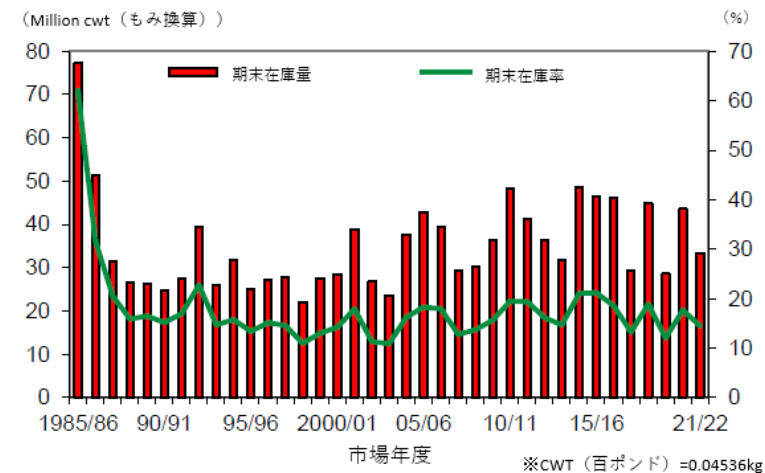
コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは約 25%
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2割

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22 (単位:百万精米トン)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	5.9	7.2	6.1	-	▲ 15.7
消費量	4.6	4.9	4.6	-	▲ 4.7
輸出量	3.0	3.0	2.8	▲ 0.0	▲ 7.4
輸入量	1.2	1.1	1.0	▲ 0.0	▲ 10.2
期末在庫量	0.9	1.4	1.1	0.0	▲ 23.7
期末在庫率	12.0%	17.8%	14.4%	0.2	▲ 3.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.00	1.21	1.01	-	▲ 16.5
単収(もみt/ha)	8.38	8.54	8.64	-	1.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)

図: 2021/22 年度の期末在庫が対前年度比で 23%以上減少見通し



出典: USDA Rice Outlook : February 2022(2022.2.11)

< インド > 2021/22 年度の輸出量が上方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.2%増の 125.0 百万トンで史上最高の見込み。

インド農業農民福祉省の 2 月報告 (2022.2.11) によれば、例年 425 万ヘクタールほど作付されているラビ作の 2 月 11 日時点の作付済み面積は、前月時点より 211.4 万ヘクタール増加し、351.5 万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、対前年度比 3.0%増の 103.0 百万トンで史上最高の見込み。2021/22 年度の輸出量は、西アフリカ、エチオピア及びスリランカ向けの輸出が引き続き増加するとの予測により、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、対前年度比 0.8%減も 2 年連続で高水準の 20.0 百万トンの見込みで世界シェアの約 4 割を占める (右グラフ参照)。なお、2020/21 年度の輸出量は、対前年度比 62%増の 20.2 百万となり史上最高となる見込み。2021/22 年度の期末在庫量は、輸出量が上方修正されたことから前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、対前年度比 5.6%増の 38.0 百万トンで史上最高の見込み。なお、インドの期末在庫量は世界全体の約 2 割を占める見通し。

インド商務省の輸出量データによれば、2021 年 4 月～12 月の累積輸出量は 1,527.7 万トンであり、輸出量の多い国の上位はバングラデシュ (158.7 万トン)、ネパール (99.8 万トン)、ベナン (95.1 万トン) になっている。

USDA「Rice Outlook」(2022.2.11)によれば、インド産米 (碎米 5 %混入) の 2 月 8 日までの週の価格は、1 月 11 日までの週より 5 ドル上昇して 350 ドル/トンとなったが、アジアの主要輸出国である、タイやベトナム産より低価格なパキスタンの同時期の同等クラスの輸出価格 355 ドル/トンと比較しても、引き続いてアジアの中で最も競争力のある価格になっている (P19 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ (小麦) の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

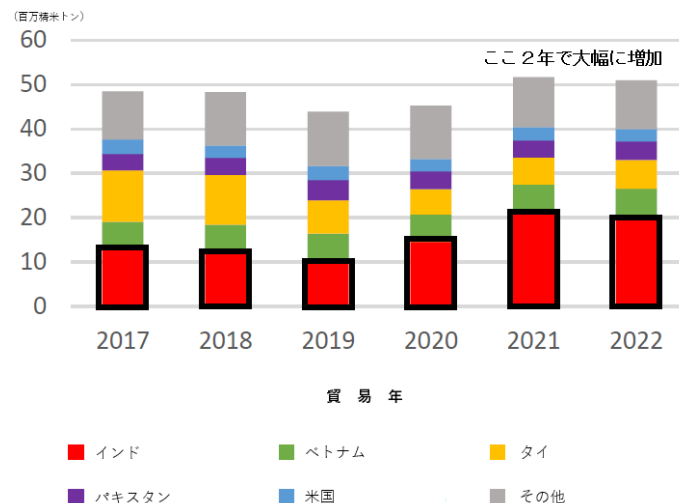
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	118.9	122.3	125.0 (124.5)	-	2.2	
消 費 量	102.0	100.0	103.0 (104.0)	▲ 0.5	3.0	
輸 出 量	12.5	20.2	20.0 (17.8)	0.8	▲ 0.8	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	33.9	36.0	38.0 (38.8)	▲ 0.3	5.6	
期末在庫率	29.6%	30.0%	30.9% (31.8%)	▲ 0.3	0.9	
(参考)						
収穫面積 (百万ha)	43.66	45.00	45.50 (45.75)	-	1.1	
単収 (もみt/ha)	4.08	4.08	4.12 (2.72)	-	1.0	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(9 February 2022)

IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図: 世界の主要コメ輸出国のグラフ



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2022.2.9)

< 中国 > 2021年のコメ輸入量が史上最高

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.5%増の149.0百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からわずかに下方修正されたものの、対前年度比3.0%増の154.8百万トンで史上最高の見込み。2021/22年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比9.0%増の4.6百万トンの見込み。2021/22年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比3.0%減の113.0百万トンの見込み。なお、中国の期末在庫量は世界の約6割を占める見通し。

中国国家糧油情報センター（2022.2.8）によれば、2021年、中国は前年比68.7%増の490万トンのコメを輸入し史上最高を記録。そのうち252万トン（約5割）を砕米が占めた。国別では、インドから109万トン（22.0%）を輸入し、初めて最大の輸入先国となった。中国のインドからの輸入は主に砕米であった。以下ベトナム（108万トン、21.7%）、パキスタン（96万トン、19.4%）、ミャンマー（80万トン、16.0%）、タイ（60万トン、12.3%）などとなり、輸入先は多様化している。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報12月号」によれば、12月、全国平均品種別買付価格は、政府備蓄用の買付と各地方政府の備蓄補充及び新穀・旧穀の入れ替え需要に支えられ、晩稲インディカもみとジャポニカもみの価格は強気に取引されたが、早稲インディカもみは晩稲に比べて人気がないことからやや下落した。一方、全国平均品種別米卸売価格は、新型コロナウイルス感染者が国内の複数個所で確認されたことで、防疫措置による外出制限からコメ市場が低迷し、インディカ米価格は若干下落したが、黒龍江省のみぞれ天候や新型コロナウイルスによる流通への影響から、ジャポニカ米価格は上昇した。2021年12月の全国平均品種別米卸売価格は、早稲インディカ米は3,780元/トン（前月より0.5%下落、晩稲インディカ米4,060元/トン（前月同）、一期作ジャポニカ米4,100元/トン（前月より2.5%上昇）になっている。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位: 百万精米トン)

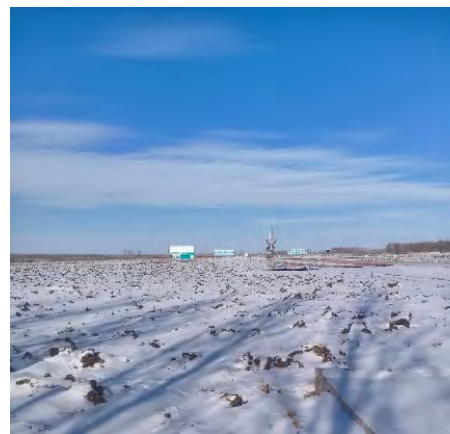
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	146.7	148.3	149.0	(149.5)	-	0.5
消 費 量	145.2	150.3	154.8	(150.5)	▲ 0.0	3.0
輸 出 量	2.6	2.2	2.3	(2.6)	0.0	1.4
輸 入 量	2.6	4.2	4.6	(3.7)	-	9.0
期末在庫量	116.5	116.5	113.0	(109.5)	-	▲ 3.0
期末在庫率	78.8%	76.4%	71.9%	(71.6%)	▲ 0.0	▲ 4.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.69	30.08	29.92	(30.00)	-	▲ 0.5
単収(もみt/ha)	7.06	7.04	7.11	(4.98)	-	1.0

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

写真: 黒龍江省の水稲圃場の状況



水稲圃場は越冬期に入っており、1月の平均最高気温は-12℃、平均最低気温は-20℃で、前年同期比2～3℃高い状況
1月に何回か降雪があり積雪は10～12cm程度で、4月以降の播種に向けて、全体的な土壌の水分含有量は平年並みの模様

< タイ > 2020/21 年度の輸出量が上方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22 年度(2022 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.3%増の 19.3 百万トンの見込み。2020/21 年度(2021 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 6.8%増の 18.9 百万トンの見込み。

タイ農業経済局「農業経済 2021 年 12 月号」によれば、乾季作米は 2022 年 2 月～10 月にかけて出荷される見通し。最も多く出荷されるのは 2022 年 3 月から 4 月にかけてであり、全体の出荷量の 59.1%に当たる 359.9 万トンが出荷される見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はないが、2020/21 年度の輸出量が 0.2 百万トン上方修正されたことで、対前年度比 7.3%増の 6.5 百万トンの見込み。2021/22 年度のタイは、ベトナムの輸出量(6.5 百万トン)と並び、インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

タイ米輸出業協会の発表によれば、2021 年の輸出量が対前年比 6.7%増の 612 万トンとなった。輸出先国の上位 5 か国は、南アフリカ(77.3 万トン)、中国(63.3 万トン)、米国(57.4 万トン)、ベナン(37.4 万トン)、日本(29.2 万トン)の順。また同協会は、2022 年の輸出量目標を 700 万トンとしており、2022 年 1 月の輸出量を約 70 万トンであったと見ている。輸出に対するプラス要因として、世界経済の回復、タイの米生産量の増加、バーツが対米ドルで安定する見込みであることが挙げられている。コンテナ不足や出荷の滞留による貨物の飽和による作業スペースの狭小等の課題は残されているが、物流面の問題は改善されると見ている。

USDA「Rice Outlook」(2022.2.11)によれば、2 月 7 日までの週のタイ産米(長粒、2 等丸米)の輸出価格は、タイバーツ高を主な要因として上昇し、1 月 10 日までの週の価格より 32 ドル高い 429 ドル/トンとなっている(P19 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。

コメ・タイ

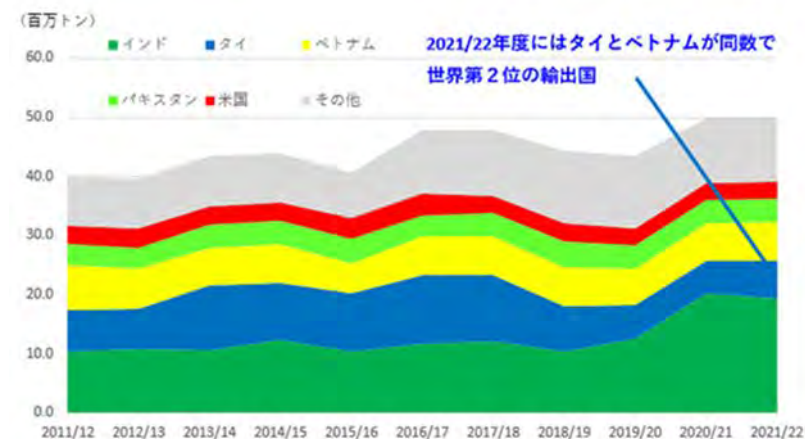
夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	17.7	18.9	19.3 (19.3)	-	2.3	
消 費 量	12.3	12.7	13.0 (11.9)	-	2.4	
輸 出 量	5.7	6.1	6.5 (7.7)	-	7.3	
輸 入 量	0.3	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	4.0	4.3	4.3 (6.7)	▲ 0.2	-	
期末在庫率	22.1%	22.8%	21.9% (34.0%)	▲ 0.8	▲ 0.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.89	10.51	10.40 (10.40)	-	▲ 1.0	
単収(もみt/ha)	2.70	2.72	2.81 (1.86)	-	3.3	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図: 世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.2.9)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021 年の輸出量は約 627 万トンの見通し

【生育・生産動向】USDA によれば、2020/21 年度(2021 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 1.1%増の 27.4 百万トンの見込み。2021/22 年度(2022 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.7%減の 27.2 百万トンの見込み。ベトナムの農家では、土壌の塩分濃度上昇や水の供給量の減少を理由に、コメ作から他の作物や非農業用途への転換が進んでいる。

ベトナム農業・農村開発省によれば、2021 年の総生産量は 43.9 百万もみトンの見込みであり、内訳は冬春作が 20.6 百万もみトン (47.0%)、夏秋作が 15.2 百万もみトン (34.6%)、ムア作(雨季作)が 8.1 百万もみトン (18.4%) になる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 3.7%増の 6.5 百万トンの見込み。

2020/21 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 1.6%増の 6.3 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 66.7%減の 0.6 百万トンの見込み。なお、2020/21 年度にベトナムが例外的に大量のコメを輸入したことから、2021/22 年度の対前年度比は大幅に減少している。

USDA 「Rice Outlook」(2022.2.11)によれば、ベトナム産米(長粒種、5%碎米混入)の 2 月 8 日までの週の価格は、旧正月により貿易活動が活発でなかったことにより、1 月 25 日までの週より 5 ドル下落し、395 ドル/トンとなり、パーツ高により価格が上昇したタイ産米よりも安くなっている。

ベトナム税関総局によれば、2021 年 1 月～12 月の輸出量は 627.3 万(対前年比 1.5%増)トンであり、上位からフィリピン(245.5 万トン)、中国(105.9 万トン)、ガーナ(67.8 万トン)の順になっている。そのうちジャポニカ米は対前年同期比 30.9%減の 17.3 万トンになっている。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.1	27.4	27.2 (28.3)	-	▲ 0.7	
消費量	21.3	21.5	21.5 (23.1)	-	0.2	
輸出量	6.2	6.3	6.5 (6.4)	-	3.7	
輸入量	0.4	1.8	0.6 (1.0)	-	▲ 66.7	
期末在庫量	1.2	2.6	2.4 (3.1)	▲ 0.0	▲ 8.0	
期末在庫率	4.3%	9.5%	8.7% (10.4%)	▲ 0.1	▲ 0.8	

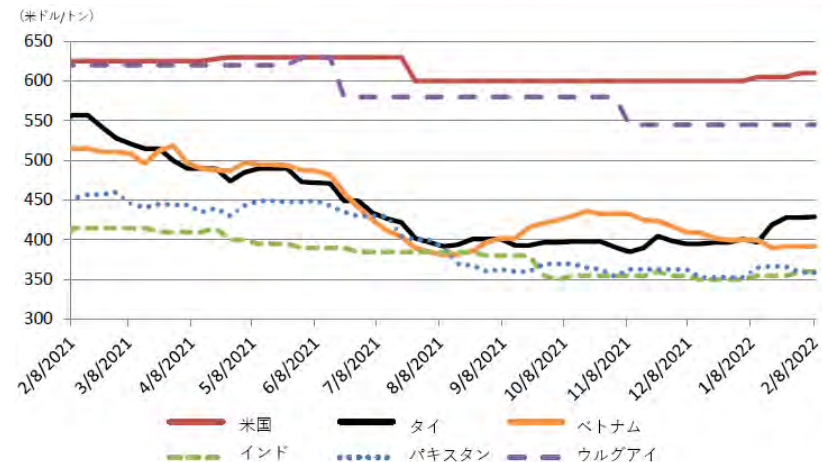
(参考)

収穫面積(百万ha)	7.38	7.31	7.30 (7.45)	-	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	5.88	6.00	5.96 (3.80)	-	▲ 0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)

IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図: 長粒種の FOB 価格の推移(ベトナム産とタイ産の価格差が拡大)



資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2022.2.9)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2021/22 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ブラジル、パラグアイ、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。

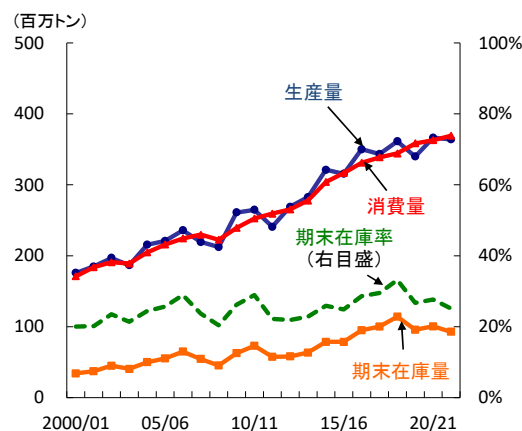
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国等で上方修正も、中国、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.2.9）をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

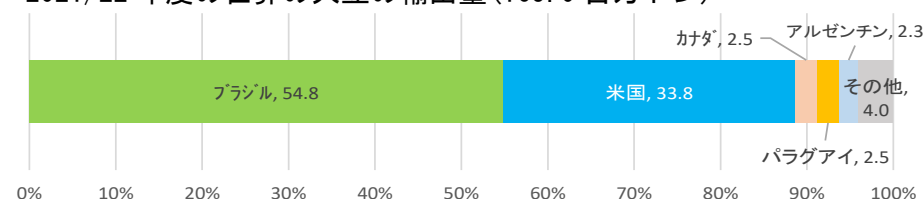
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	339.9	366.2	363.9	▲ 8.7	▲ 0.6
消 費 量	358.4	362.7	369.2	▲ 5.8	1.8
うち搾油用	312.4	315.3	320.2	▲ 5.5	1.6
輸 出 量	165.1	164.3	165.0	▲ 5.7	0.4
輸 入 量	165.0	165.6	162.8	▲ 5.7	▲ 1.7
期末在庫量	95.6	100.4	92.8	▲ 2.4	▲ 7.6
期末在庫率	26.7%	27.7%	25.1%	▲ 0.2	▲ 2.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 February 2022）

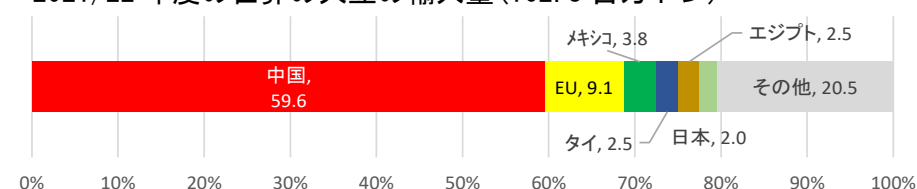
○ 2021/22 年度の世界の大豆の生産量 (363.9 百万トン) (単位：%)



○ 2021/22 年度の世界の大豆の輸出货量 (165.0 百万トン)



○ 2021/22 年度の世界の大豆の輸入量 (162.8 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は史上最高も、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.2%増の120.7百万トンと史上最高の見込み。なお、単収は2016/17年度に次ぐ史上第2位となっている。前年11月末時点で、収穫は例年並みのペースでほぼ終了した。

【需要動向】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、米国内の良好な搾油マージンに加え、アルゼンチン、ブラジルなどの大豆粕輸出が減産の影響で減少することによる米国産の代替として大豆粕輸出需要の上方修正により搾油用需要が前月予測から0.7百万トン上方修正され、前年度より4.0%増の63.5百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、史上最高の輸出量となった前年度より9.3%減の55.8百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高（2022年1月6日～2月3日）は、6.8百万トンであり、内訳は中国（4.0百万トン）、メキシコ（0.5百万トン）、イタリア（0.4百万トン）、ドイツ（0.2百万トン）の順。

USDAによれば、2021/22年度の期末在庫量は、消費量の上方修正に伴い前月予測から0.7百万トン下方修正され、前年度より26.5%増の8.8百万トンの見込み。期末在庫率は7.4%で依然として低水準の見込み。

大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	96.7	114.8	120.7	-	5.2
消費量	61.9	61.1	63.5	0.7	4.0
うち搾油用	58.9	58.3	60.3	0.7	3.5
輸 出 量	45.7	61.5	55.8	-	▲ 9.3
輸 入 量	0.4	0.5	0.4	-	▲ 24.1
期末在庫量	14.3	7.0	8.8	▲ 0.7	26.5
期末在庫率	13.3%	5.7%	7.4%	▲ 0.6	1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.33	33.43	34.94	-	4.5
単収(t/ha)	3.19	3.43	3.45	-	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 南部の高温・乾燥で単収下方修正、生産量は減産見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前年11月以降の南部産地（パラナ州、リオ・グランデ・ド・スール州等）の高温・乾燥が1月も継続した影響で生育期の大豆の単収がさらに下方修正されたことから前月予測から5.0百万トン下方修正され、前年度より2.9%減の134.0百万トンの見込み。

なお、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.2.10)によれば、2021/22年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け前月予測から15.0百万トン下方修正され、前年度より9.2%減の125.5百万トンの見込み。

南部では1月下旬に降雨があったものの、これまでの高温・乾燥の影響を改善するには遅すぎた。一方、2月中旬までブラジル中西部から北東部で広く降雨が継続し、この地域の生育・

収穫は順調である。最大生産州である中西部マット・グロッソ州では2月11日現在、収穫率は60%で、過去5年平均より12ポイント早い。南部のパラナ州では2月7日現在、収穫率は15%となっている。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から搾油用消費量が0.3百万トン下方修正されたものの、前年度より0.3%増の49.6百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から3.5百万トン下方修正されたものの、前年度より10.8%増の90.5百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1月の輸出量は245万トンで、例年より収穫が遅れた前年同期（5万トン）に比べ50倍となっている。内訳は、1位が中国で197万トン、2位がベトナムで14万トン、3位がスペインで13万トンとなっている。

大豆ーブラジル

(単位:百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	128.5	138.0	134.0 (137.0)	▲ 5.0	▲ 2.9	
消費量	49.4	49.4	49.6 (47.7)	▲ 0.3	0.3	
うち搾油用	46.7	46.8	46.9 (45.1)	▲ 0.3	0.3	
輸出量	92.1	81.7	90.5 (89.7)	▲ 3.5	10.8	
輸入量	0.6	1.0	0.5 (0.3)	-	▲ 55.9	
期末在庫量	20.0	28.0	22.4 (3.3)	▲ 1.2	▲ 20.0	
期末在庫率	14.1%	21.3%	16.0% (2.4%)	▲ 0.4	▲ 5.4	

(参考)

収穫面積(百万ha)	36.90	38.90	40.40 (40.50)	-	3.9
単収(t/ha)	3.48	3.55	3.32 (3.38)	▲ 0.12	▲ 6.5

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

写真: 中西部マット・グロッソ州の収穫直前的大豆圃場 (2月3日撮影)



ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												作付 4.5(百万ha)								
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 20.9百万ha												作付 16.4(百万ha)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												作付 40.6(百万ha)								
													収穫 24.4(百万t)								
													収穫 87.9(百万t)								
													大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし播種								

資料: CONAB穀物レポート (2022. 2. 10)

＜ アルゼンチン ＞ 高温・乾燥で単収下方修正、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、1月下旬は豊富な降雨があったものの、前年12月から1月までの主産地での高温・乾燥の影響で単収がさらに下方修正されたことから前月予測から1.5百万トン下方修正され、前年度より2.6%減の45.0百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.2.17）によれば、サンタフェ州、エントレリオス州、ブエノスアイレス州の一部で特に乾燥の影響がある。作柄は良から並みが77%で前週（83%）から悪化した。単収は過去5年平均より低い予想となっている。ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要である。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から1.4百万トン下方修正され、前年度より0.4%減の47.2百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から1.1百万トン下方修正され、前年度より27.9%減の3.8百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2021年1～12月の輸出量は5.4百万トンで、主に中国向けの減少を背景に前年（6.8百万トン）より21.0%減。内訳は、1位が中国344万トン、2位がエジプト60万トン、3位が米国9万トンとなっている。前年7月26日に発令された180日間のパラナ川の渇水の緊急事態宣言は前年末に終了したものの、パラナ川の水位は依然として低下傾向が続き、アルゼンチンの穀物等の輸出への影響に注視が必要である。

アルゼンチンは、大豆輸出量よりも、搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定し、現在も継続中。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	48.8	46.2	45.0 (44.0)	▲ 1.5	▲ 2.6	
消費量	45.9	47.4	47.2 (47.3)	▲ 1.4	▲ 0.4	
うち搾油用	38.8	40.2	40.0 (41.0)	▲ 1.2	▲ 0.4	
輸 出 量	10.0	5.2	3.8 (5.5)	▲ 1.1	▲ 27.9	
輸 入 量	4.9	4.8	3.1 (4.8)	▲ 1.4	▲ 35.7	
期末在庫量	26.7	25.1	22.2 (3.9)	▲ 0.4	▲ 11.4	
期末在庫率	47.7%	47.6%	43.6% (7.4%)	1.3	▲ 4.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.70	16.47	16.20 (16.25)	-	▲ 1.6	
単収(t/ha)	2.92	2.81	2.78 (2.71)	▲ 0.09	▲ 1.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(9 February 2022)

IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の生育風景 (1月31日撮影)

前年11月下旬に作付けされ、現在は乳熟期で
莢が着き始めている。収穫は4月中旬の予定。



< 中国 > 減産見通し、消費量・輸入量は経済成長の減速で下方修正

【生産・生育状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収益性の高いとうもろこし等への作付けのシフトにより収穫面積が減少したことから、前年度より16.3%減の16.4百万トンの見込み。

前年11月上旬時点で、収穫は終了。

【需給動向】USDA「Oil Crops Outlook」(2022.2.11)によれば、2021/22年度の消費量は、中国の経済成長の減速により豚肉、鶏肉を中心とする国内の食肉生産量が伸びないことから飼料向けの大豆粕消費が下方修正されたことに伴い、搾油用消費量が前月予測から3.0百万トン下方修正されたものの、前年度より1.9%増の113.7百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸入量は、消費量の下方修正に伴い前月予測から3.0百万トン下方修正され、前年度より2.8%減の97.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2021年1～12月の輸入量は96.5百万トンと、前年比で3.8%減。内訳は、ブラジル産58.2百万トン(60%)、米国産32.3百万トン(33%)。なお、2021年12月の輸入量は8.9百万トンで、前年同月(7.5百万トン)より17.8%増。うち、米国産が6.1百万トンと69%を占めた。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2021年12月号」によると、12月の国内価格(山東省の国産大豆工場渡し価格)は、国産大豆の作付面積や単収、生産量の下方修正の影響で農家の売り惜しみ心理が比較的強く、市場への供給が抑制されたことから、前月(6,440元/トン)から上昇し、6,540元/トンで高水準である。今後、国内大豆価格は農家が販売に消極的な中、政府備蓄大豆の入れ替えに伴う買入れにより価格が下支えされて、高値を維持するとみられている。12月の国際価格(山東省の輸入大豆価格)は4,320元/トンと前月(4,260元/トン)から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆—中国

(単位: 百万トン)

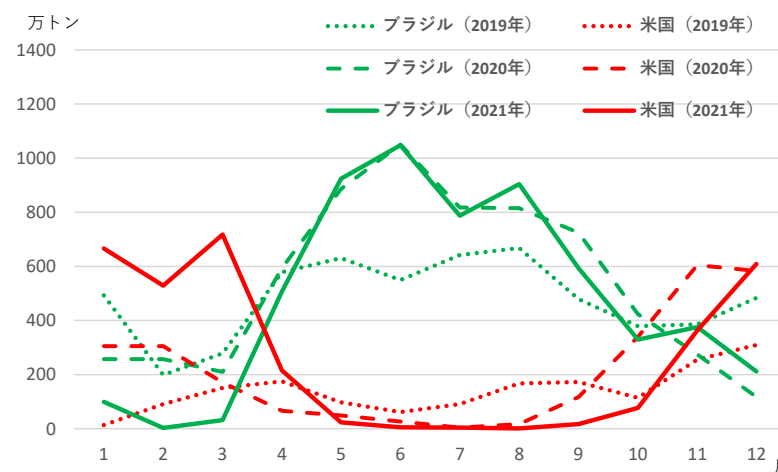
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.1	19.6	16.4	(16.4)	-	▲ 16.3
消 費 量	109.2	111.6	113.7	(117.7)	▲ 3.0	1.9
うち搾油用	91.5	93.0	94.0	(99.1)	▲ 3.0	1.1
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	42.9
輸 入 量	98.5	99.8	97.0	(98.5)	▲ 3.0	▲ 2.8
期末在庫量	26.8	34.5	34.1	(28.9)	-	▲ 1.2
期末在庫率	24.5%	30.9%	29.9%	(24.5%)	0.8	▲ 0.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.33	9.88	8.40	(8.40)	-	▲ 15.0
単収(t/ha)	1.94	1.98	1.95	(1.95)	-	▲ 1.5

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 February 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

＜ カナダ ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、生育期間の西部カナダでの乾燥の影響による単収の減少に伴い、前年度より1.4%減の6.3百万トンの見込み。前年11月末時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.2.18)によれば、今後作付けされる2022/23年度の実産量は、カナダ西部では土壌水分不足の懸念や小麦等の競合作物も価格が魅力的なことから作付面積の増加は抑えられるものの、高い大豆価格に支えられ、主産地のカナダ東部を中心に作付面積が増加し、前年度より4.4%増の6.6百万トンの見込み。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.2%減の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より7.6%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2021年12月の輸出量は238.6万トンで、国別では、イラン(36.9万トン)、イタリア(28.2万トン)、オランダ(22.6万トン)、アルジェリア(21.9万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はAAFC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	6.4	6.3	(6.3)	－	▲ 1.4
消 費 量	2.6	2.7	2.5	(2.5)	－	▲ 4.2
うち搾油用	1.8	1.6	1.8	(1.8)	－	6.6
輸 出 量	3.9	4.5	4.2	(4.0)	－	▲ 7.6
輸 入 量	0.3	0.5	0.5	(0.4)	－	▲ 3.1
期末在庫量	0.6	0.3	0.3	(0.5)	－	8.2
期末在庫率	9.6%	4.1%	4.7%	(6.9%)	－	0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.27	2.04	2.13	(2.14)	－	4.4
単収(t/ha)	2.71	3.12	2.94	(2.93)	－	▲ 5.8

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(9 February 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(18 February 2022)

(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2021/22年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	21年6月～22年5月	21年9月～22年8月	21年8月～22年7月	21年9月～22年8月
カナダ	21年8月～22年7月			21年8月～22年7月
豪州	21年10月～22年9月		22年3月～23年2月	
EU	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月		
中国	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月
ロシア	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月		21年9月～22年8月
ブラジル		22年3月～23年2月	22年4月～23年3月	21年10月～22年9月
アルゼンチン	21年12月～22年11月	22年3月～23年2月		21年10月～22年9月
タイ			22年1月～12月	
インド	21年4月～22年3月		21年10月～22年9月	
ベトナム			22年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2021/22年度は、米国の小麦では2021年6月～2022年5月、ブラジルのとうもろこしでは2022年3月～2023年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

第8号特別分析トピック①：FAO食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）

FAO食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）

国際農産物市場の動向を監視する食料価格指数として1996年から導入
1961年～1989年までは年次、1990年1月以降は月次指数を公表
毎月第1木曜にFAOから公表（<https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>）

FAO食料価格指数の算出方法

FAO食料価格指数（FFPI）	
2014-2016年の平均価格を100とした時の農産物価格動向を輸出量（額）により加重平均した価格指数。	

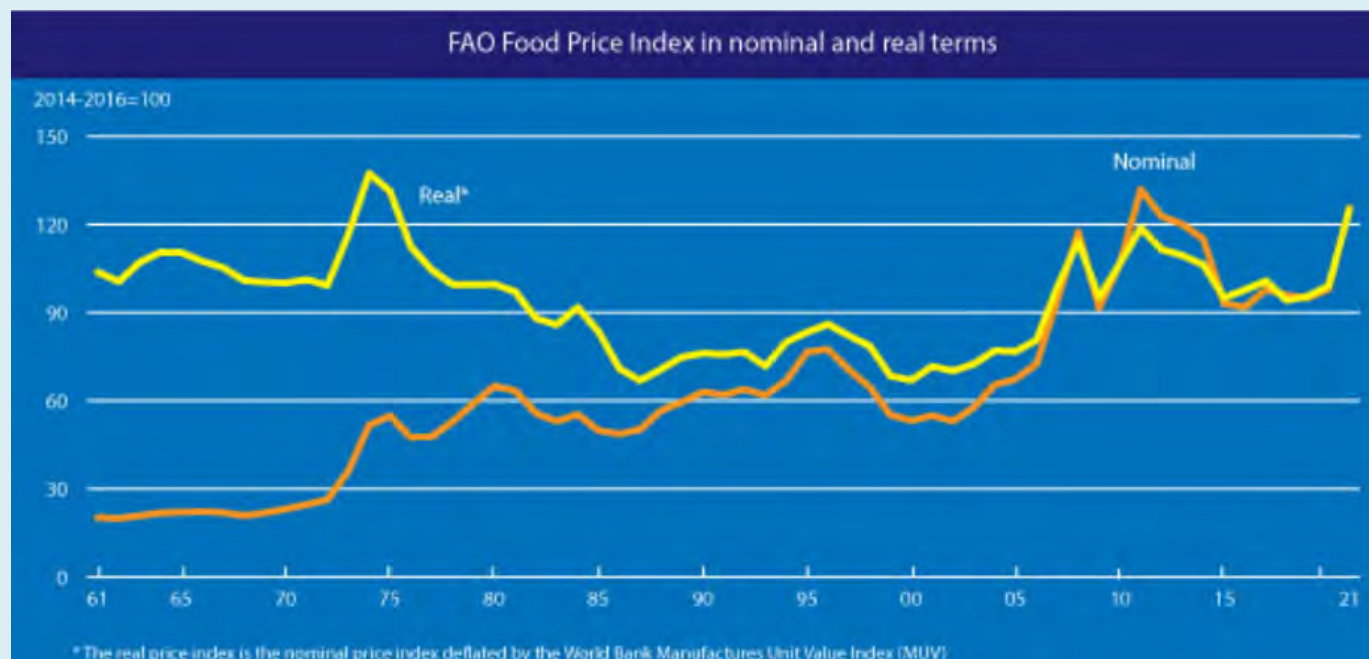
FAO食料価格指数（FFPI）の構成5品目				
穀類 (29%) 注	植物油 (17%)	乳製品 (14%)	肉類 (33%)	砂糖 (7%)
小麦、トウモロコシ、大麦、ソルガム、コメ ※コメはインディカ、アロマティック、ジャポニカ、もち米が含まれ、FAO（FAO All Rice Price Index）より算出。	大豆、ヒマワリ、菜種、落花生、綿実、ココナツ パーム核、 パーム 亜麻仁、キャスター	バター チーズ 脱脂粉乳 全粉乳	牛肉 豚肉 家禽肉 羊肉	※国際砂糖協定（International Sugar Agreement）に基づく。

注：括弧内の数字は貿易ウェイト（各品目輸出額の輸出総額に占める割合）

これまでのFAO食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）の動向

1961年～2020年における動き

- 名目FFPI**
(Nominal)
- ・ 年間2.9%の長期的な上昇傾向。
 - ・ 特に2011年2月には歴史上最高水準の137.6ポイントを記録。
- 実質FFPI**
(Real)
- ・ 全体を通して年間0.3%の長期的な下落傾向。
 - ・ 他方で、直近2000-2020年では年間1.6%の上昇傾向に転じている。



Nominal：名目FFPI。月次公表ではインフレ・デフレの影響が小さいため公表の迅速性を優先し、名目FFPIを使用している。
Real：実質FFPI。インフレ/デフレが物価に与える影響を排除するため名目FFPIに世界銀行指数（※）を用いて算出された数値。長期FFPIを公表する際に使用されている。

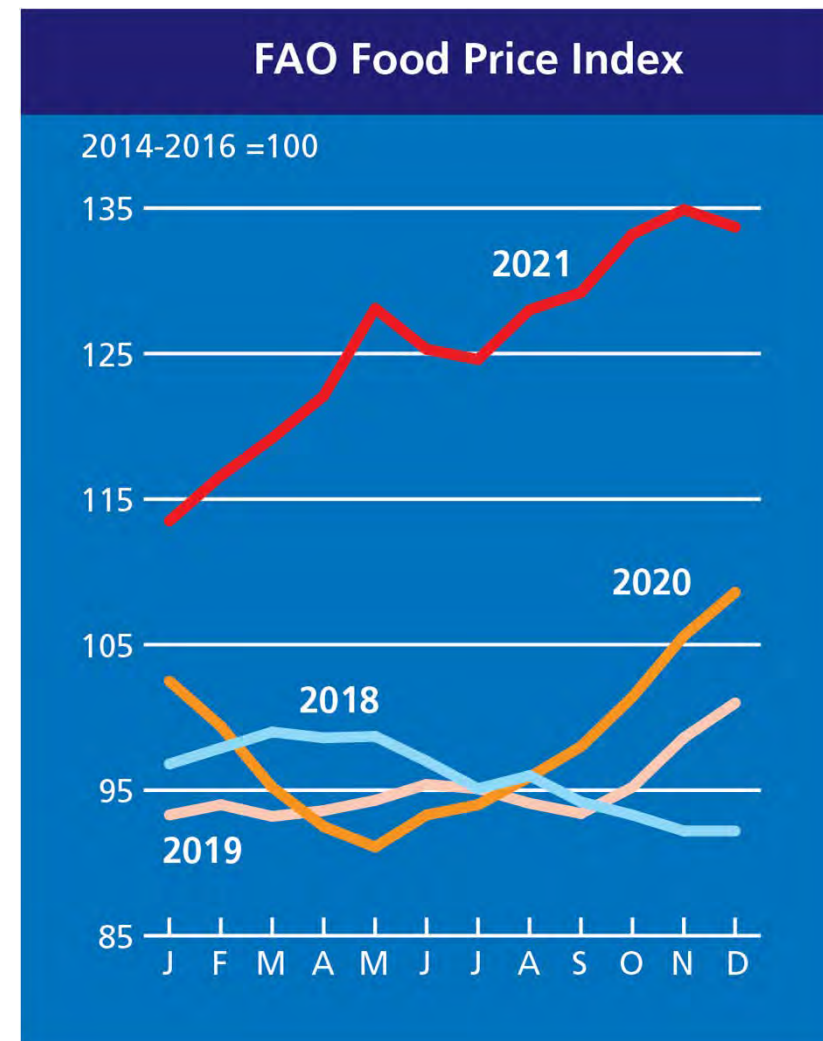
※ the World Bank's manufactures unit value(MUV) index。実質FFPIの算出に用いる指数デフレーターの種類により、実質FFPIが変動しうることに留意。

2021年のFAO食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）

FFPI全体

2021年平均は125.8ポイント
（前年比27.7ポイント上昇）

- ・全ての品目で前年よりも**大幅に上昇**
- ・特に、11月には穀物、乳製品、砂糖の影響を受け、**2011年6月以来の最高水準**。



参照：<https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>

注：数値は2022年1月公表時点のもの。四捨五入の関係により公表数値と異なる場合がある。

2021年のFAO食料価格指数（FFPI：FAO Food Price Index）の動向

【穀物】

年平均131.2ポイント（前年比28.1ポイント**上昇**）

- ・年間を通じて堅調に上昇し、11月には2013年2月以来の高水準を記録。特にトウモロコシ・小麦が需給逼迫により上昇。コメは2021年に下落した唯一の主要穀物。

【植物油】

年平均164.9ポイント（前年比65.5ポイント**上昇**）

- ・マレーシアでの新型コロナに伴う移動制限に関連した移民労働力不足継続によるパーム油の生産低迷への懸念やパーム油・大豆油・ヒマワリ油の世界的需要増等により10月には史上最高水準（※）を記録。

※2021年12月 末時点。2022年1月にはさらに史上最高記録を更新。

【乳製品】

年平均119.1ポイント（前年比17.3ポイント**上昇**）

- ・年間を通じて堅調に上昇。特にアジアからの年間を通じての持続的な輸入需要と、主要生産地域からの逼迫した輸出供給を反映。

【肉類】

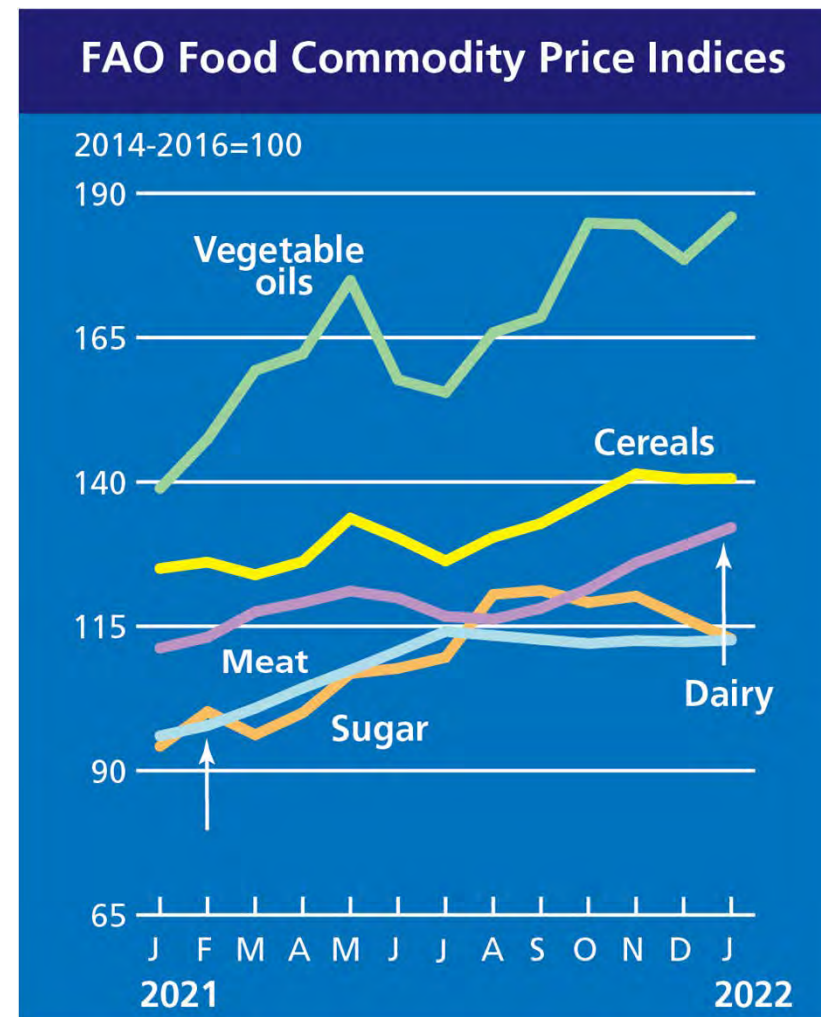
年平均107.8ポイント（前年比12.3ポイント**上昇**）

- ・年上半期に安定して上昇した後、年下半期で一定に推移。豚肉の価格がわずかに下落した一方で、羊肉が最も急激な価格上昇を記録し、次に牛肉と家禽肉が続いた。

【砂糖】

年平均109.3ポイント（前年比29.8ポイント**上昇**）

- ・年間を通じて、砂糖に対する世界的な需要が高まる中、ブラジルでの生産量の減少に対する懸念が価格を上昇。



参照：<https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>
注：数値は2022年1月公表時点のもの。四捨五入の関係により公表数値と異なる場合がある。

(参考1) FAO食料価格指数の基準年の考え方

- ・ 現在、過去10年間でほとんどの市場で最も代表的な期間と見なされた「**2014-2016年**」を**基準期間**として採用
- ・ 国際的に取引される価格と数量の両方の変動の影響を最小限に抑えるため**3年間の期間**が選択
- ・ 時間の経過とともに新しい条件（取引パターンの変動等）が有効性、代表性、適時性に影響を与えるため、**基準期間・品目要素を見直すことが不可欠**。

2020年7月には、それまでの基準期間であった「2002-2004年」が、2008年以降の農産物価格の高騰を受け有効性・代表性を失ったことから、新しい基準期間として「2014-2016年」に見直された。改定に合わせて過去のFFPIも全て更新されている。

【表1】基準期間改定前と現行の貿易ウエイト比較

改定前後で各品目の貿易ウエイトは大きく変化していない。
トウモロコシ等シェアの上昇により穀物のウエイトは1ポイント上昇。
パーム油シェアの大幅な増加等により植物油は3ポイント上昇。豚肉シェアの減少等により肉類は2ポイント減少。脱脂粉乳・全粉乳のシェア減少により乳製品は2ポイント減少した。

【図1】基準期間改定前と現行のFFPI比較（90年以降）

改定前後で大きな変化はないが、現行のFFPIはやや低い上昇率を示している。これは肉類と乳製品の改定後の価格上昇率の減少と同品目の貿易ウエイトが低下がある程度相殺されたことによる。

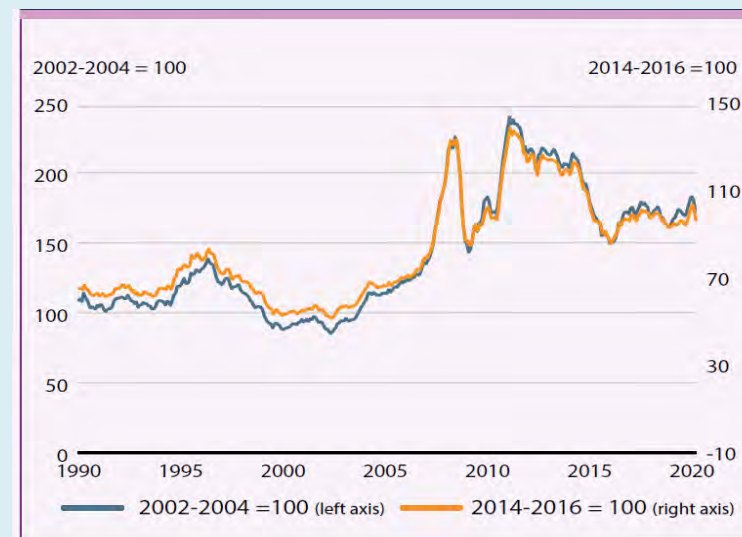
参照：Food Outlook BIENNIAL REPORT ON GLOBAL FOOD MARKETS(June, 2020)

【表1】基準期間改定前と現行の貿易ウエイト比較

Base	Food	Cereals	Oils	Sugar	Meat	Diary
2002-04	1.00	0.28	0.14	0.07	0.35	0.16
2014-16	1.00	0.29	0.17	0.07	0.33	0.14

Note: Trade weights are calculated using average trade values from the FAOSTAT trade database.

【図1】基準期間改定前と現行のFFPI比較



(参考2) FAO食料価格指数 (FFPI : FAO Food Price Index) の計算方法

ラスパイレス物価指数・・・基準年を設定し、現在の平均価格で基準年と同じ物を同じ数量購入した場合に必要な金額はどれだけ変化するかを基準年を100として示した数値。

ラスパイレス物価指数は一般的に

$$LI_t = \frac{\sum P_{it} Q_{i0}}{\sum P_{i0} Q_{i0}} = \sum \frac{P_{it}}{P_{i0}} \frac{P_{i0} Q_{i0}}{\sum P_{i0} Q_{i0}}$$

と表される。

LI_t : t年におけるラスパイレス物価指数(Laspeyres price index)

P_{it} : t年における品目iの価格、 P_{i0} : 基準年における品目iの価格

Q_{it} : t年における品目iの数量、 Q_{i0} : 基準年における品目iの数量

ここで $\frac{P_{i0} Q_{i0}}{\sum P_{i0} Q_{i0}}$ は基準年における品目iの輸出額シェアだから、 S_{i0} とすると、

$$FFPI_t = LI_t = \sum \frac{P_{it}}{P_{i0}} \boxed{\frac{P_{i0} Q_{i0}}{\sum P_{i0} Q_{i0}}} \rightarrow S_{i0}$$
$$= \sum S_{i0} \left(\frac{P_{it}}{P_{i0}} \right)$$

となり、基準年の価格に対するt年の価格比率 $\left(\frac{P_{it}}{P_{i0}} \right)$ を基準年のシェア(S_{i0})で加重平均した指数であることがわかる。

参照:https://www.fao.org/fileadmin/templates/worldfood/Reports_and_docs/FO-Expanded-SF.pdf

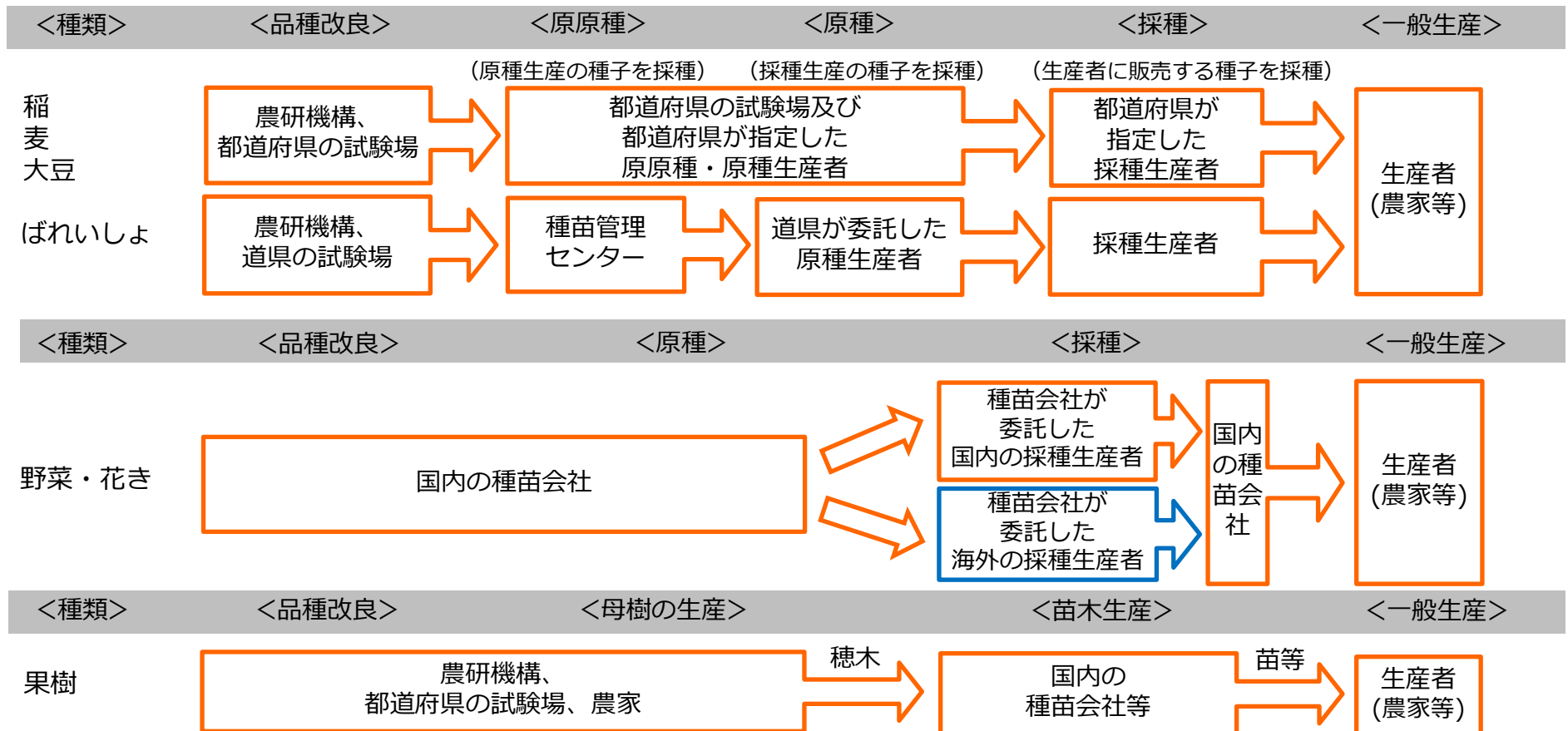
第8号特別分析トピック②：種苗をめぐる情勢について

我が国における種苗の供給体制

- ・ 稲、麦、大豆、ばれいしょ等の主要農作物の種子は、農研機構や都道府県の試験場が開発した優良な品種の原原種を元にして国内の種苗生産地で段階的に増殖され、供給されている。
- ・ 野菜・花きの種子は、国内の種苗会社が開発した優良な品種を用いて国内及び海外の生産地で増殖され、供給されている。
- ・ 果樹の苗は、農研機構や都道府県の試験場等が開発した優良な品種の母樹の穂木（枝）を国内で他の品種（台木）に接いで増殖し苗木に仕立てられ、供給されている。

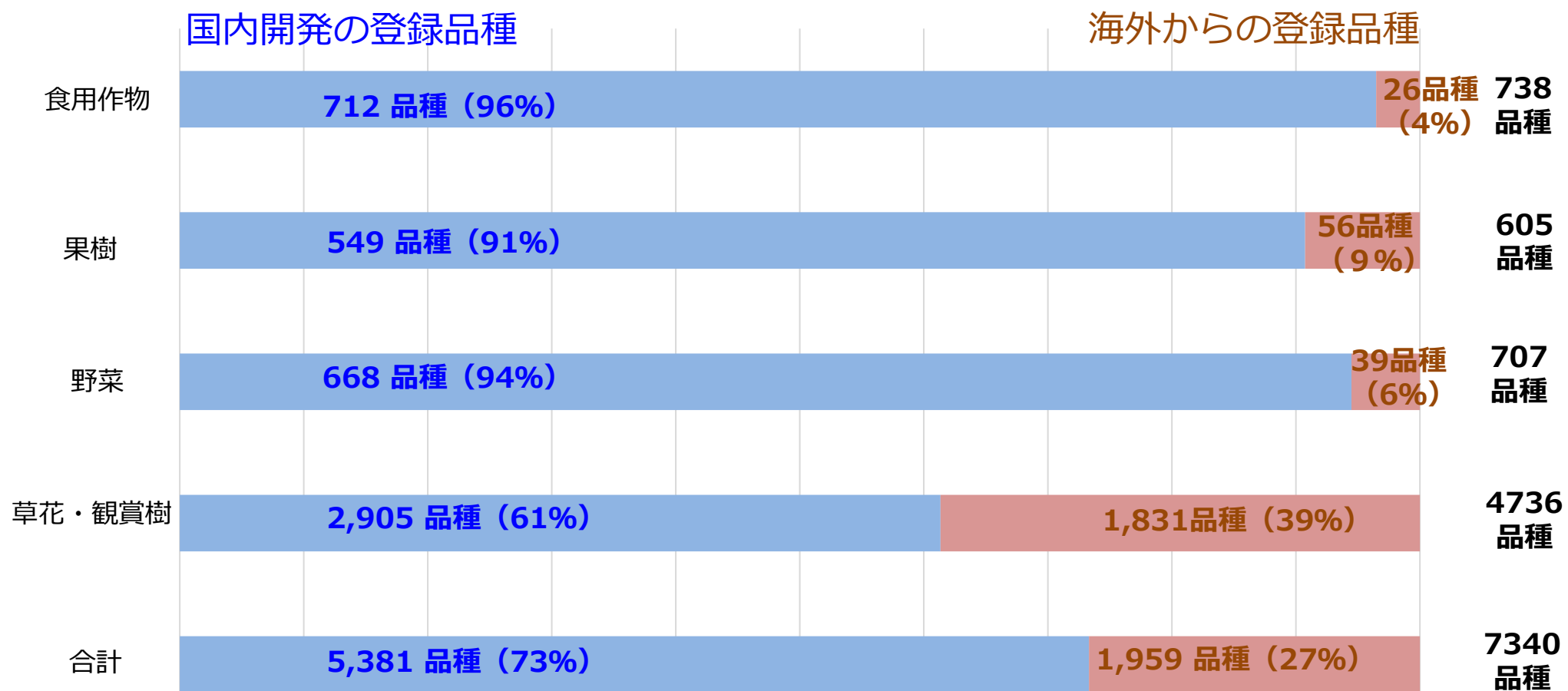
【種子供給の代表的な例】

国内 → 海外



我が国農業は国内で開発された品種に支えられている

- 種苗法では、外国で開発された品種も登録されれば国内品種と同等に保護されるが、花き類を除くと、**海外で開発された登録品種はわずか**。
- 種苗法による**登録品種の保護の恩恵**を受けるのは、**国内の品種開発者**である。



我が国における種苗の需給動向

- ・ 稲、麦類、大豆の種子、果樹の苗木は**ほぼ全てが国産**。
- ・ 野菜の種子の多くが、交雑品種※（F1品種）であり、多種多様な品目の供給が必要となる野菜の種子を**安定的に生産**する必要性や、一般に、作物は**原産地に似た気候**で育てた方が**良質な種子**ができること等の理由により、約9割が海外で生産されているが、①外国の企業ではなく、**日本の種苗会社が生産し日本向けに確保**していること、②**リスク分散の観点から複数の国で生産**していること、③**約1年分の種子を国内に備蓄**していること等により**種子の供給が安定的に行える**。

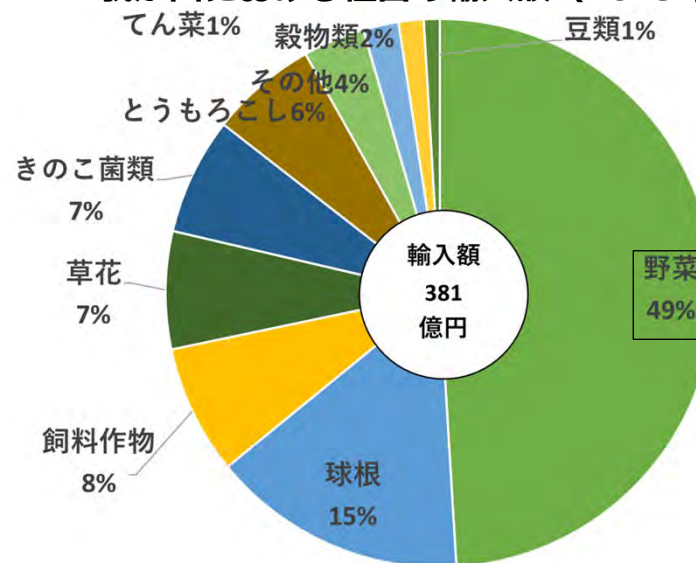
※優良な親品種の雄株と雌株を交配し、作り出したより優良な品種のこと

我が国の種苗販売市場規模

品目	販売額（億円）
穀物	311.8
果樹	266.5
野菜	1,689.8
花き	300.3
合計	2,568.4

（資料：JATAFF「令和2年度種苗産業動向調査」）

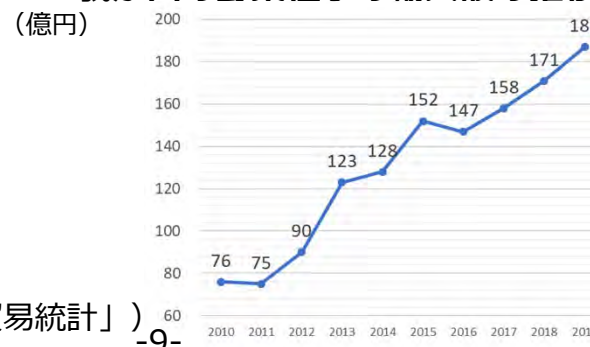
我が国における種苗の輸入額（2019年）



野菜種子の輸入元国

国名	輸入額 （百万円）	数量 （トン）
チリ	5,609	578
アメリカ合衆国	3,310	1,751
中華人民共和国	1,813	530
イタリア	1,620	651
南アフリカ共和国	1,421	152
オーストラリア	688	232
タイ	669	53
デンマーク	536	673
ニュージーランド	497	389
インド	448	63
その他	2,080	280
合計	18,689	5,352

我が国の野菜種子の輸入額の推移



（資料：財務省「貿易統計」）

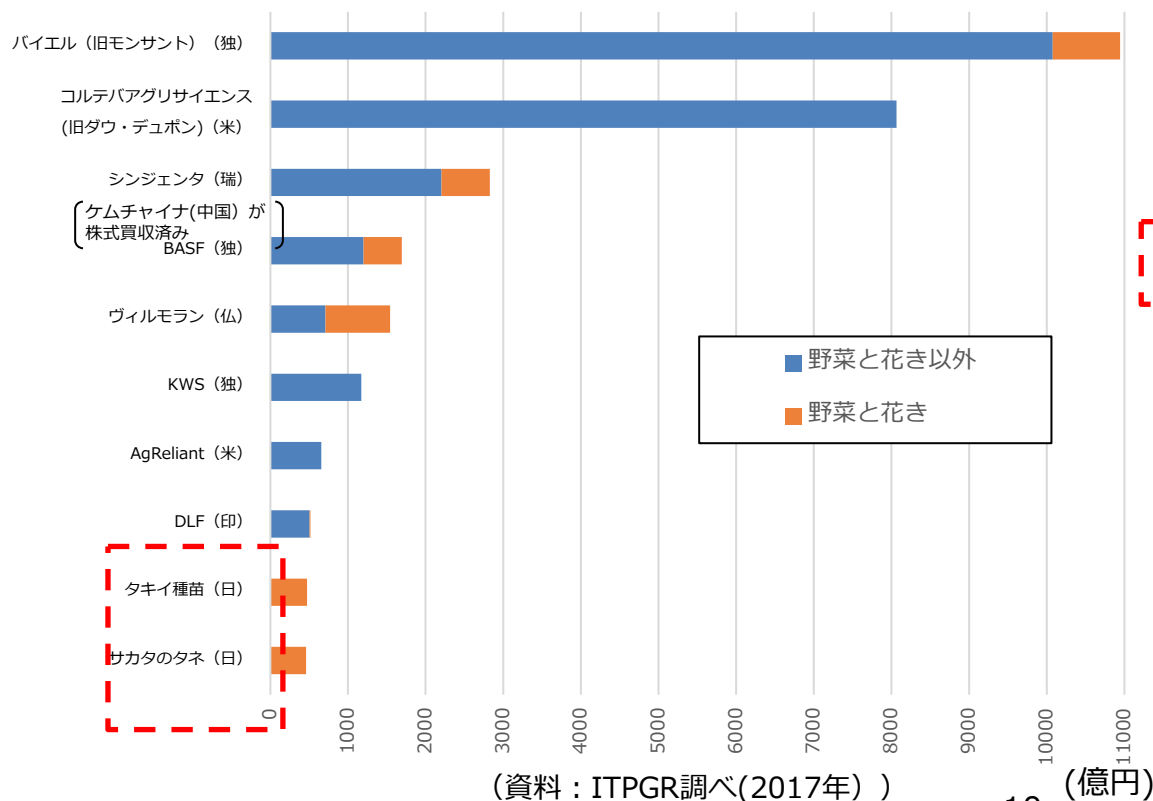
（参考）野菜種子の輸出先国（2019年）

国名	輸出額 （百万円）	数量 （トン）
中華人民共和国	1,930	286
香港	1,477	32
大韓民国	862	53
ベトナム	443	51
ブラジル	424	24
アメリカ合衆国	390	37
インドネシア	339	24
イラン	271	15
フィリピン	261	41
コロンビア	258	19
その他	1,900	225
合計	8,556	807

世界の主要な種苗会社の概要

- 世界の主要な種苗会社の種苗売上高をみると、バイエル（旧モンサント）（独）、コルテバアグリサイエンス（米）、シンジェンタ（瑞）等が上位を占めており、我が国からは、**サカタのタネ及びタキイ種苗が世界上位10社**に入っている。
- 両社は、多くの国に展開しているグローバル企業で野菜種子においては上位を占めており、特に、**サカタのタネはブロッコリーで高い世界シェア**、**タキイ種苗は東南アジアのキャベツで高いシェア**を有している。
- 国内市場の拡大が見込めない一方、種苗の国際競争の激化が見込まれており、我が国種苗会社のさらなる輸出拡大や海外展開が重要。

世界の主要な種苗会社の種苗売上高（2017年）



野菜種子及び花き種子の主要会社のシェア

	販売実績 (億円)	シェア (%)
バイエル（モンサント）	922	17.0
ヴィルモラン	886	16.3
シンジェンタ	661	12.2
BASF	522	9.6
タキイ種苗	503	9.3
サカタのタネ	491	9.0
DLF	11	0.2
その他	1,784	32.8

（資料：ITPGR調べ
(2017年)）

我が国の種苗会社の海外展開事例

サカタのタネ

- ブロッコリーの約65%、トルコギキョウの約75%、パンジーの約30%の世界シェア

タキイ種苗

- キャベツのインドネシアでのシェア約70%、タイでのシェア約50～60%
- 観賞用ヒマワリ及びハボタンの世界シェア約70～80%

我が国で開発された優良品種の海外流出

- ・ 日本で開発された品種は海外でもニーズが高く、シャインマスカットが中国や韓国に流出し、現地で生産され、一部がタイや香港等に輸出されている。
- ・ 流出先国における市場を喪失するだけでなく、第三国における市場も喪失する懸念がある。

【国内】

- ・ シャインマスカットは我が国で育成されたブドウ品種
- ・ 甘みが強く、食味も優れ、皮ごと食べられることから、高値で取引



苗木が海外に流出

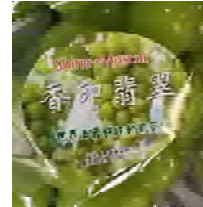
海外への輸出可能性大

【中国】

- ・ 「陽光バラ」「陽光玫瑰」「香印翡翠」等の名称での販売を確認
 - ・ 「香印」を含む商標の出願（香印青提、香印翡翠）が判明
 - ・ 日本原産として、高値で苗木取引
- ※「香印」はシャイン (xiāng yìn)と発音



中国産「陽光バラ」
(約490円/パック)



中国産「香印翡翠」
(約1,357円/kg)

【韓国】

- ・ 韓国国内でのシャインマスカットの栽培、市場での販売を確認

生産物が更に輸出

流出先国における市場の喪失

【東南アジア等】

- ・ タイ市場で中国産、韓国産シャインマスカットの販売を確認
- ・ 香港市場で中国産、韓国産のシャインマスカットの販売を確認
- ・ マレーシア、ベトナム市場で韓国産シャインマスカットの販売を確認



タイ市場で発見された
中国産「陽光バラ」



タイ市場で発見された
韓国産「SHINE MUSCAT」

第三国における市場の喪失

※ 農林水産省委託事業調べ（一部情報については農林水産省調べ）

中国および韓国への海外流出の現状

- 中国や韓国において、流出した種苗が日本の生産を超える規模で栽培され、産地化されている。
- 日本の優良な品種が海外に流出することは、我が国の輸出機会の損失につながる問題であり、知財を適切に保護しなければ、日本の農業の競争力が失われるおそれがある。

1. 流出国における生産拡大

ブドウ「シャインマスカット」

国名	栽培面積	総栽培面積に占める割合
中国	53,000ha	7% (2020年推定)
韓国	1,800ha	15% (2019年)
日本	1,625ha	12% (2018年)

※2020年以降、中国全体の栽培面積の10%を占めると言われている。

イチゴ「紅ほっぺ」

国名	栽培面積	総栽培面積に占める割合
中国	44,000ha	25% (2018～19年)

参考：日本におけるイチゴの栽培面積 5,200ha(2018年産)
(出典) 野菜生産出荷統計

(出典) 中国・韓国:(公社)農林水産・食品産業技術振興協会調べ
日本:平成30年産特産果樹生産動態等調査

2. 流出国からの輸出拡大

2019年以降、シャインマスカットの韓国からの輸出量が日本からの輸出量を上回る。



タイ市場で発見された
韓国産「SHINE MUSCAT」



出典：旬の食材百科事典

海外流出防止に関する種苗法改正

- 改正前の種苗法では、一旦、登録品種が販売されると育成者権が消尽し、その後に 海外に種苗が持ち出されることは育成者権の侵害に当たらなかった。
- 種苗法を改正し、出願者が、品種登録出願時に、①登録品種の種苗を持ち出す意図がある国を「指定国」として指定し、②指定国以外の国への種苗の持出しを制限する旨の利用条件を農林水産省に届け出ること、登録品種の国外への持出しについて、育成者権者が制限できることとした。
- 既登録品種等も届出が可能であり、登録品種の半数以上、公的機関が開発した品種のほぼ全てで海外持出しが制限（4,888品種）されている。

海外持出しが制限されている主な品種

主な品目	主な届出品種
稲	ゆめぴりか、青天の霹靂、つや姫、新之助、富富富 等
麦	ネバリゴシ、きたほなみ、きぬあかり、さめきの夢2009 等
大豆	はたゆたか、いわいくろ、シュウレイ、黒っこ姫 等
かんしょ	べにはるか、クイックスweet、からゆたか、ハロウィンズsweet 等
りんご	ルビースweet、恋空（あおり16）、シナノリップ、サワールージュ 等
もも	さくひめ、ふくおとめ、なつっこ、おかやま夢白桃 等
ぶどう	シャインマスカット、ルビーロマン、クイーンルージュ（長果G11）、オーロラブラック 等
かんきつ	あすみ、せとか、湘南ゴールド、みえ紀南1号、紅まどonna、甘平 等
いちご	もういっこ、きらび香、あまおう（福岡S6号）、いちごさん（佐賀i9号）等
メロン	アルシス、ゆめてまり、イバラキング、TLタカミ 等
ネギ	ふゆわらべ、足長美人、湘南一本 等
花・観賞樹	リップルピーチ（スイトピー）、天女の舞（シクラメン）、銀河（アジサイ）等
茶	せいめい、さいのみどり、つゆひかり、鳳春、さきみどり 等

海外流出の防止に向けた課題

- 品種登録をして、改正種苗法に基づく海外持出制限等の届出をただけでは、新品種は守られない。
- 育成者権者自ら、国内における登録品種の適正な管理、海外流出防止対策に取り組むことが必要であることを周知。

育成者権者自ら、以下の取組を実施することが必要

- 増殖を許諾する場合は、許諾先及び許諾の条件を明確に設定するなどにより、登録品種の増殖実態を把握する。
- 侵害が疑われる場合には、自ら権利侵害の事実を発見し、必要な権利行使のための侵害立証を行う。
- 収集した証拠を基に、必要に応じて弁護士等に相談し、警告書の発出、税関に対する輸出入差止申立て、訴訟などの必要な対応を行う（悪質性がない場合には許諾契約の締結も可能）。差止請求には、増殖の事実、増殖を許諾している場合には許諾条件が遵守されていないことなどの証拠が必要であり、損害賠償請求には、これらに加えて違法増殖された種苗の数量や増殖種苗により生産された収穫物の流通量を示す証拠も必要。
- 国内出願と併せて、海外での品種登録出願を検討し、侵害リスクが高い国等には出願を行う（国の海外出願支援事業を活用可能）。

我が国の優良品種の海外流出防止

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 2 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--